

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

## 令和元(2019)年度 実施報告書

2020年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

## 令和元（2019）年度 実施報告書

2020年3月

お茶の水女子大学 グローバル協カセンター



## はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業とその他の資金による令和元（2019）年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

グローバル協力センターは、国際協力・平和構築を中心とした国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を2つの柱として、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の海外調査支援、他大学と連携したワークショップ、シンポジウム・公開講演会、幼児教育分野の人材育成のための研修等に取り組んでいます。また、「共に生きる」スタディグループを通じた、学生による自主活動を展開してきています。

本学は、2002年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んできており、今年度も女性教員等短期研修、絵本・図書館活動支援を実施し、継続的なアフガニスタン女子教育支援に取り組んでまいりました。

また、国際社会において議論が進んでいる「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」を取り上げ、2017年度から学内連続公開講座を開催しています。今年度は、国内の貧困問題とNPO、途上国の女子教育・ノンフォーマル教育をテーマに有識者を招聘しセミナーを開催しました。

本事業の実施にご支援、ご協力を賜りました学内外の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。今後もこれまでの活動で得た平和構築と途上国の社会経済開発のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用して更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと存じます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

2020年3月

国立大学法人お茶の水女子大学  
グローバル協力センター長 棚橋 訓



グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和元（2019）年度 実施報告書目次

はじめに

I. 事業の概要	1
II. 令和元（2019）年度の活動の概要	5
1. 活動の概要	7
2. 各活動の概要	7
III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成	9
1. 「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」	11
2. センター教員担当の授業・セミナー	22
2. 1 全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ[実習]」、「平和と共生演習」、グローバル文化学環「平和と共生演習」	22
2. 2 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー	28
3. 海外調査支援	33
4. 大学間連携イベント	36
4. 1 「被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支援～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」	36
4. 2 「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」	39
5. 「共に生きる」スタディグループの活動	41
5. 1 学生自主活動	42
5. 2 微音祭（大学祭）における展示・発表	47
IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）	55
1. アフガニスタン女性教員・研究者の短期研修（野々山基金）	57
2. アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト（国際協力機構（JICA）PEACE プロジェクト）	59
3. アフガニスタンへの絵本寄贈（野々山基金）	60
4. 乳幼児ケアと就学前教育研修（国際協力機構（JICA）課題別研修）	63

V. その他 .....	67
1. グローバル協力センター図書室利用状況 .....	69
2. 情報発信 .....	70

# I. 事業の概要



## I. 事業の概要

### 【事業名】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」

### 【事業期間】

平成 22 (2010) 年度から令和元 (2019) 年度

平成 22 (2010) 年度に文部科学省特別経費事業として 4 年計画で開始し、平成 23 (2011) 年度から大学一般経費事業に組み替え継続。

### 【概要】

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

### 【事業実施主体】

国際本部グローバル協力センター

### 【目的・目標】

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第 2 期中期目標・計画前文）。さらに、世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界の女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によ

って傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられている。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

## II. 令和元（2019）年度の活動



## II. 令和元（2019）年度の活動

### 1. 活動の概要

グローバル協力センターは、国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を2つの柱としており、今年度は、1つ目の柱について、「国際共生社会論実習」（開発途上国スタディツアー）等の授業、海外調査支援、大学間連携イベント、2つ目の柱について、アフガニスタン女性教員等短期研修、アフリカ・中東向け「乳幼児ケアと就学前研修」等を実施した。また、「共に生きる」スタディグループを通じて、学生による自主活動を展開した。

本学は、2002年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んできているが、今年度は、女性教員等短期研修（野々山基金）、絵本・図書館活動支援（野々山基金）を実施し、継続的なアフガニスタン女子教育支援に取り組んできた。

また、国際社会において議論が進んでいる「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」を取り上げ、2017年度から学内連続公開講座を開催している。今年度は、国内の貧困問題とNPO、途上国の女子教育・ノンフォーマル教育をテーマに有識者を招聘しセミナーを開催した。大学間連携イベントでも、同アジェンダにおいて「今日の世界が直面する課題」として取り上げている頻発する災害と紛争について、人道・緊急支援に関するワークショップを開催した。

### 2. 各活動の概要

(1) 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

1) 平成23（2011）年度から実施し、平成25（2013）年度に全学共通科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」として正規科目に位置づけた海外スタディツアーをカンボジアとネパールで実施した。農村や都市の貧困と格差、ジェンダー、教育や保健分野の開発をテーマとして、フィールドでの聞き取り調査を行い、現場からの学びと考察を深めた。

2) 全学共通科目「NPO入門」、「NPOインターンシップ（実習）」を通じて、学生にNPOに関して学ぶ機会を提供するとともに、学生が国内のNPOでインターンとして活動し、公益を目的とする団体における実務経験の獲得を可能にした。

全学共通科目「平和と共生演習」において、SDGsで取り上げる飢饉、貧困、教育、保健等について、プレゼンテーション、議論を通じて、こうした課題についての現場の状況を理解し、現場の視点で考える機会を提供した。

グローバル文化学環「国際協力特論」において、途上国の社会経済の問題と国際協力について、貧困、格差、雇用、教育、保健を取り上げ、講義や議論を通じて、考察を深める機会とした。Collaborative Online International Learning(COIL 型授業)を通じて、日米の他大学学生との議論を深めた。

3) 海外調査支援では、「国連・持続可能な開発目標の 17 ゴール」をテーマとして募集を行い、「フランスにおけるクィアマイグレーションと「黒人 LGBT」の日常実践ーサハラ以南アフリカ諸国出身者を対象にー」1 件の調査についての支援を行った。

4) 大学間連携イベントとして、「被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支援」を開催し、国内の災害においても関心が高まっているスフィア・スタンダードについての理解を深める機会とした。また、『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」を開催し、本学及び他大学の学生に、途上国におけるフィールド調査に関する実践的な学びの機会を提供した。

5) 「共に生きる」スタディグループを通じて、学生の自主活動を支援した。今年度は、中古教科書販売によるラオス・教育支援、シリア難民支援、途上国の栄養の課題に関するワークショップ「視野を広げよ、管理栄養士の卵」、「途上国の栄養について知ろう」講演会、国際社会青年育成事業参加報告会、学園祭でのパネル展示・発表が行われた。

(2) 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

1) アフガニスタン女子教育支援の一環として、野々山基金により、アフガニスタン女性教員・研究者 2 名の短期招へいを実施した。

2) 国際協力機構「アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト」による研修員の受け入れを継続した。

3) 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会との連携により、アフガニスタンにおける絵本作成配布・図書館事業を支援した。

4) 乳幼児の保護と教育の観点から、国際的にニーズが高まっている幼児教育分野の人材育成のため、アフリカ・中東の 6 か国の行政官、視学官、指導主事等を対象に「乳幼児ケアと就学前教育研修」（国際協力機構課題別研修）を実施した。

III. 国際的な課題に関する教育・研究、  
これらを通じた同課題に取り組む  
女性リーダーの育成



## 1. 「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」

### (1) 実施概要

#### 1) 目的

専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士前期課程）が、開発途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査を実施し、現場に根ざした学習を行う。また成果をレポートにまとめて学内で発表する。平成 25 年度より 2 単位の正規科目として実施している。学内公募・選考を通じて参加した学生数はネパール 8 名、カンボジア 10 名の合計 18 名であった。

#### 2) 事前学習

履修説明会実施後、各グループ全 8 回（一部合同）の事前学習を通じ訪問国の社会経済や参加者の関心分野について学習した。

- ① 6 月 3 日（月）事務手続きに関する説明（合同）
- ① 6 月 6 日（木）全体スケジュールに関する説明（合同）、国別分科会
- ② 6 月 12 日（水）健康管理、予防接種に関する説明（合同）、国別分科会  
講師：本田保健管理センター所長

#### ●ネパール・グループ

- ③ 6 月 20 日（木）学習の進め方、フィールドワークの方法、等
- ④ 6 月 27 日（木）文献講読・ディスカッション  
・ネパールの通史
- ⑤ 7 月 4 日（木）文献講読・ディスカッション  
・ネパールの民族・宗教・社会の多様性
- ⑥ 7 月 11 日（木）文献講読・ディスカッション  
・ネパールのジェンダー課題：寡婦を中心に
- ⑦ 7 月 18 日（木）文献講読・ディスカッション  
・ネパールの再生可能エネルギーの社会経済的インパクト
- ⑧ 7 月 25 日（木）調査テーマ発表
- ⑨ 8 月 6 日（火）安全講習会（安全、健康面での留意点について説明、等）

#### ●カンボジア・グループ

- ③ 6 月 18・20 日（火/木）文献講読・ディスカッション  
・カンボジアの現代史：ポル・ポト時代
- ④ 6 月 25・27 日（火/木）文献講読・ディスカッション

- ・農村女性の生活
- ⑤ 7月 2・4日 (火/木) 文献講読・ディスカッション
- ・基礎教育の課題
- ⑥ 7月 9・11日 (火/木) 調査の進め方
- ⑦ 7月 18日 (木) 「ジェンダー課題と国際協力」
- 講師：JICA 国際協力専門員 山口綾氏
- ⑧ 9月 10日 (火) 調査の進め方・安全講習

本科目と別に、7月6日(土)に大学間連携イベント『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方が開催され、本科目受講学生が参加した。

7月6日(土)『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方  
講師：前川香子氏 認定NPO 法人ムラのミライ 海外事業チーフ

### 3) 現地実習

●ネパール (8月25日から9月1日まで8日間)

#### i) 参加人数

参加学生 8名 引率者 2名 (青木健太講師、原智佐特任准教授)

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	2	1	1	/	4
2	0	1	1		2
3	0	0	1		1
4	1	0	0		1
博士前期課程	0	0	0	0	0
合計	3	2	3	0	8

#### ii) プログラム実施概要

国連によって後発開発途上国 (LDC: Least Developed Country) として認定されている域内最貧国の一つであるネパールを訪問し、同国が抱える社会、経済、ジェンダー等における諸課題に関する理解を深めることを目的として、各自が設定したテーマに基づくフィールド調査を行った。また、民族・言語・宗教・イデオロギーなどの面で多様性豊かなネパール社会において、現地の人々がどのように融和を保ちながら暮らしているのかを間近に見ることで、グローバル社会における共生のあり方について学んだ。

今回のツアーでは、ネパールにおける地域ごとの暮らしや格差について理解を深めるため、首都カトマンズのみならず、ネパールの政府機関である代替エネルギー促進センター (AEPC) の協力を得て、農村部での再生可能エネルギーを用いた生計向上プロジェクトの

訪問、並びに、地域住民とのインタビューを実施した。現場見学に加えて、訪問前の AEPC 本部における説明、および、ジェンダー専門家によるレクチャーにより、政府による電化が進まない地域における再生可能エネルギーの普及によって、農村の女性や子どもの生活（教育、健康、医療等）が改善し、また、ビジネスによる収入獲得等を通じて生計向上が図られることを重層的に理解した。また、AITM (Asian Institute of Technology and Management) 学生との交流プログラムを実施し、参加学生は同年代のネパール人学生との交流を図った。このほか、今回のスタディツアーでは、現地で働く国連職員、青年海外協力隊員との交流の時間を設けた他、日本大使館、JICA、ネパール政府機関、NGO、高等教育機関など様々なアクターを訪問し、実際に現地で働く方々それぞれからの視点について学ぶとともに、将来のキャリア開発に資する内容になるよう配慮した。

### iii) 調査日程

8月25日(日)	0:20 羽田発—4:50 バンコク着 (TG661) 10:15 バンコク発—12:25 カトマンズ着 (TG319) ジェンダー専門家の講義 お茶大大学院博士号(社会科学)取得留学生との会食
8月26日(月)	代替エネルギー促進センター(AEPC)事業概要説明 在ネパール日本語大使館ブリーフィング
8月27日(火)	JICA ネパール事務所事業概要説明 青年海外協力隊員との交流 JICA 事業地見学(震災復興支援によって建設された小学校)
8月28日(水)	カブレパランチョーク郡・ラメチャップ郡における AEPC 事業地見学(ソーラー発電、小型水力発電、バイオガス等を通じた生活改善)
8月29日(木)	AITM (Asian Institute of Technology and Management) 学生との交流プログラム NGO サルタック事業概要説明、学校訪問
8月30日(金)	市内文化財見学(カトマンズ・ダルシール広場、スワヤンプナート寺院、等)
8月31日(土)	13:30 カトマンズ発—18:15 バンコク着 (TG320) 22:45 バンコク発 (TG682)
9月1日(日)	6:55 羽田着



AEPC 事業地見学 (8月28日、於カブレパランチョーク郡)



大学生との交流プログラム (8月29日、於 AITM)

●カンボジア（9月14日から9月22日まで9日間）

i) 参加人数

参加学生 10名、引率者 2名（原智佐特任准教授、駒田千晶AA）

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	7	0	0		7
2	3	0	0		3
3	0	0	0		0
4	0	0	0		0
博士前期課程	0	0	0	0	0
合計	10	0	0	0	10

ii) プログラム実施概要

1970年代から長期にわたる内戦とポル・ポト派による市民の虐殺を経て1990年代以降平和構築と社会経済開発に取り組むカンボジアの歴史を理解した上で、農村に暮らす人々、また都市の学生等への聞き取り調査を行い、貧困と格差、ジェンダー課題、教育、保健といった地球規模課題について、自身の視点で考察を深めることかできた。

今回のスタディツアーでは、以下を含むテーマについて、聞き取り調査、また学生同士の議論が行われた。

- 学校においてドロップアウトが発生する様々な構造
- ドロップアウトが発生する構造と子供たちの将来の選択肢の関係
- 貧困層を対象とした健康保険の制度と実際の運用の乖離
- 貧困削減における市民の政治参加の重要性と困難さ
- 政治参加と情報の果たす役割、等

聞き取り調査を通じて、多様な生活、考え方をもちた人々に接し、また、議論を通じて、様々な問題を構造的に見ることができた。

また、質問（英語）を考え、聞き取り調査等を通じて柔軟に質問内容を掘り下げていくことで、より広範な情報を得、理解を深める、ということも有意義な経験となった。

iii) 調査日程

9月14日（土）	成田空港発→プノンペン着（NH817）
9月15日（日）	プノンペン→コンポンチャム 市内視察、農村調査に関する打合せ
9月16日（月）	農村における社会経済調査 （コミュニケーションオフィス、ヘルスセンター、学校、農村の世帯等）
9月17日（火）	農村における社会経済調査

9月18日(水)	農村における社会経済調査 コンポンチャム→プノンペン
9月19日(木)	難民を助ける会(AAR)-Wheelchair for Development(WCD) インクルーシブ教育プロジェクト説明、車いす工房説明と見学 Japan Cambodia Interactive Association 車いす受益者面談
9月20日(金)	カンボジア日本人材開発センター JICAカンボジア事務所事業説明 青年海外協力隊員活動説明
9月21日(土)	ツールスレン虐殺博物館、セントラルマーケット 最近の政治情勢についての講義 プノンペン発→
9月22日(日)	→成田空港着(NH816)



#### 4) 事後学習

事前学習を踏まえ、自ら設定したテーマについて、現地でのフィールド調査により得られた情報について、学生間の議論を通して、問題の背景や構造への考察を深め、報告書を作成した。また、10月24日(木)、25日(金)、29日(火)、30日(水)に帰国報告会を開催し、調査の結果得られた学びを学内で共有するとともに、11月9日(土)から10日(日)まで開催された徽音祭において学術企画の枠で一般向けに発表を行った。

#### (2) スタディツアーの成果

##### 1) 成果

貧困と格差、ジェンダー課題、教育、保健といった地球規模課題について、現場を訪問し、人々の声を聴くことで、自身の視点で考察を深めることができた。以下は、考察を深めることができたトピックの例。

##### (ネパール)

- 農村電化の女性のエンパワメントへの影響

- 農村における学校の不足と都市で働きながら学校に行く子供たちを巡る教育と格差についての議論

- 都市と農村、教育現場におけるジェンダー格差

(カンボジア)

- 学校においてドロップアウトが発生する様々な構造
- 貧困層を対象とした健康保険の制度と実際の運用の乖離
- 貧困削減における市民の政治参加の重要性と困難さ
- 途上国の見方が、「貧しい途上国」というステレオタイプの理解から、「多様な生活、考え方をもった一人一人」という視点に変化した。
- 英語での聞き取り調査、プレゼンテーションの経験は、実践的な英語能力の向上の今後の学習のモチベーションにつながった。

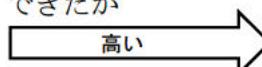
## 2) 参加学生アンケートに見る成果

スタディツアー実施前と終了後に参加学生に対して、参加の目的、参加満足度や参加経験を今後どのように活かしていくかに関するアンケートを行った。以下はその集計結果である。

### Q1. 本スタディツアーに参加する目的

- ・ネパールの教育やジェンダー的課題について調査し、自分なりの考察を得るため。
- ・発展途上国の教育の現状の視察。
- ・途上国について知って抱えている問題の解決方法を考えること。
- ・単位取得、知的好奇心を満たすこと、自分の知らない世界を知ること。
- ・国際協力に興味を持ち、発展途上国について理解するため。
- ・フィールドワーク。
- ・異文化理解。
- ・カンボジアの衛生・医療の現状を実際に見て調査するため。
- ・カンボジアの農村における経済状況を学ぶため。
- ・現地調査、自分の視野を広げること。
- ・カンボジアで聞き取り調査を行う。
- ・カンボジアのリアルな生活や国民の関心について学ぶため。
- ・教育・子育てという自分の決めたテーマから、カンボジアの様子を現地調査するため。
- ・実際に発展途上国に行くのは初めてなので、どんな社会で人々はどのような暮らしをしているのかを学びたい。
- ・途上国の現状を知ること、調査法を体験的に学ぶこと。
- ・自分の視野を広げるため。発展途上国の様子を実際に感じ、知るため。

Q2. 本スタディツアーで目的をどの程度達成（満足）できたか



満足度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
人	0	0	0	0	0	1	1	6	5	5

学生コメント（上記目的達成度の理由）

- ・ネパールの教育やジェンダー的課題について調査し、自分なりの考察を得ることができたから。
- ・様々な分野で学べるように訪問先が充実していたのと、毎日研修後にフィードバックを行って理解を深められたから。
- ・プログラムには熱心に取り組めたが体調管理が十分ではなかったから。
- ・以前類似した研究を行った際、様々な課題や現地で確かめることの重要性を感じた。今回のスタディツアーではその時に感じた課題（特にデータ上ではあまり見られない国内の格差という点）を肌で感じ、充実した学びを得られた。
- ・実際に発展途上国を訪れることで多くの発見や新たな価値観を知ることができたから。
- ・行って初めて分かったことがたくさんあったから。
- ・現地を生で見て、これまで紙媒体や映像資料で得ていた知識を覆されるくらい、変化しつつあるネパールの様子を肌で感じ取ることができた。南アジア訛りの英語が聞き取れなかったり自分もうまく話せなかったのがマイナス要素としてあげられる。
- ・今までインターネットでしか得ることができなかったことをより深く学ぶことが出来た。
- ・自分の専門分野はもちろん、自分の専門分野以外の深い話も聞けたから。
- ・国際協力分野に興味があるので、初めての途上国への渡航という点では大変有意義なものとなった。
- ・現地でしか得られない情報を得て色々と考えられたという点ではとても良かったが、インタビューであまり積極的になれなかったため。
- ・途上国の現状を自分の目でしっかり確かめることができ、また自分の思っていた以上にたくさんの方からお話いただけただからです。
- ・仲間と協力して積極的にフィールドワークができたから。1点減点の理由は、引率の先生方に頼りすぎてしまったから。
- ・質問などの準備が少し不十分であったため、きちんと自分のテーマに沿った調査ができなかったため。
- ・日本にいただけでは分からないことを実際に現地で肌で感じる事ができたと思うが、自分自身の能力のなさをも感じた。
- ・もう少し深掘り出来たのではないかと思う。
- ・途上国の現実を見たい、政治について知りたいという自分の目的を達成できたから。

- ・思っていた以上のことを学べた。

Q3. 本スタディツアーによる経験が学業、就職活動等に役立っているのか。

有益度	どちらともいえない	役立っていない	あまり役立っていない	役立っている	非常に役立っている
人	0	0	1	7	10

学生コメント（上記の理由）

※あまり役立っていない理由として、まだ就職活動を始めていないというコメントがあった。

- ・ネパールという発展途上国に行くことで日本では絶対に得られない学びを得ることができたため、この経験を今後の生活に生かせそうだから。
- ・外国語の勉強に対する意欲が湧いたから。
- ・今回の学びが、実習科目における研究テーマだけでなく、自分の学科の専門分野にも活かせるものだと感じた。
- ・自分がいかに恵まれた環境にいて日々過ごしているかを実感し、より勉学に対する意欲が湧いたため。
- ・自分の目で確かめることが大切だと感じるから。
- ・自分の興味関心が広がり、今回得た内容が研究対象になりそうである。また世界からの視点で自国を見るようになり、視野が広がる経験をいただいた。
- ・自分の学業分野であるジェンダーについて他の国の状況を知ることができたから。
- ・自分の目指す専攻分野が変わるかもしれない。
- ・統計からだけでは見えてこない国の実情をこの目で見ることができたから。
- ・途上国を訪れたことを通していろいろな見方や考え方を学ぶことができたから。
- ・たくさんの方からお話を聞いて、さらに途上国について知りたいと思うようになったので、今後の勉学のモチベーションになったと思います。
- ・今回の留学は、非常に良い経験になった。自分の価値観や考え方がいい意味で変化した。
- ・自国のことをいかに知らないかということを実感することができ、今後の学習意欲の向上につながったため。
- ・今後の学習へのモチベーションにつながった。
- ・普段では経験できないことが経験できたから。
- ・自分がこのプログラムに参加する前に考えていたことを実際に自分の目で見て確かめることができたため、机上の空論にならずに考えられるようになったから。
- ・視野が広がり、モチベーションもあがったから。

Q4. 本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか

留学指向	どちらとも いえない	思わない	あまり思わ ない	思う	非常に思う
人	2	1	0	11	4

学生コメント（上記の理由）

- ・自分の学びを深め、様々な景観を得たいと思ったから。
- ・より多くの経験を積みたいから。
- ・語学力を上げたいから。
- ・自分の進路を明確に決めてから検討したい。
- ・留学を経て、多様な価値観を得るには語学の習得が不可欠でそのための語学留学は役に立つと思から。
- ・長期滞在することで、現地の人々がどのように生活しているのかを追体験できるため。
- ・今回はホテル泊で、現地の暮らしや文化、宗教についてはまだまだ理解が浅い。研究のためにも長期滞在したい。
- ・短期では知ることができない、生活してみて気づくことがあると思うから。もっと深くまで研究したい。
- ・長期間海外で暮らすことで、短期よりも圧倒的に自分の見聞が広まり、人生経験になり、絶対将来役立つと思うから。
- ・途上国の現実を知るのに、より長い期間の滞在が必要だと感じたから。
- ・一週間という短期では他国を知ったり他国の人と交流するには短すぎると感じたから。
- ・やはり開発の勉強を専門的に学ぶのであれば、留学では足りないと思うからです。
- ・今回の留学で、複雑に絡み合う様々な分野に対する関心が高まった。学んだことを整理することで、自分の研究対象を明確にし、長期留学に行きたい。
- ・自国のことをいかに知らないかということを実感することができ、今後の学習意欲の向上につながったため。
- ・お金がかかるのと4年で卒業するのが難しくなるから。
- ・今回の留学を通じて外国の文化を学ぶことに興味を持ったからもっと長期で滞在し、深く学びたいと思った。
- ・日本に拠点を置いて得られる学びを最大限に得ることを現在の目標としているから。
- ・今回の学習が充実していたから。

Q5. 本スタディツアー中、意欲的に取り組んだ内容やその成果について。

- ・ネパールの教育の男女差や地域差について調査を行なった。結果、ネパールの教育の男女差は都市部ではなく、農村部でも少なくなっており事前に考えていた以上にネパールの教育は発展しているとわかった。

- ・教育分野に関することを積極的に調べ、発展途上国の現状を様々な視点から観察した。
- ・自分の調査テーマに関する内容について積極的に質問し多くの情報を得られた。
- ・各訪問先で学んだことをその日の夜に整理し、自分の研究テーマ・仮説に照らし合わせて仮説を練り直すというサイクルをこまめに行うようにしていた。その結果、より深い学びができ、テーマに関する学びを掘り下げられたように考える。
- ・気になったことを積極的に聞くことで価値観を広げられた。わからなかったことも周りに聞くことで解決した。
- ・**food contamination** に関して、様々な飲食店で厨房の写真を手に入れることができた。住民や組織への聞き取り調査がメインだったため、積極的に質問したり、交流したりした。話者の主観的な内容を聞きつつも、客観的な事実をそこから見つけたり、考察したりし、現地で得たことを日本に応用して考えるのに繋がった。
- ・私は今回ネパールの女性の立場について農村と都市部ではどのように違うのかを両方の女性に積極的にインタビューをしたり、専門家の人にも自分が聞きたいことを全て質問し、ネパールの女性の地位について知識を得ました。
- ・質問の答えの英語をできる限り沢山、正確に聞き取ろうとした。また、相手に分かりやすい質問を心がけた。相手を尊重して、デリケートな質問はその人に合わせて削ったり変えたりした。
- ・一番周りの環境に左右されやすい、子どもの健康問題について、カンボジアの農業事情や食糧事情から考察した。
- ・インタビューでできるだけ良い情報を得られるよう工夫した。また、現地の暮らしや文化を理解しようと心がけた。
- ・自分の興味があった途上国での教育についてインタビューする際、何を聞いたら自分のリサーチに役立つか考えながら質問しました。聞きたいことが相手に伝わり、よいインタビューができたと思います。
- ・内容：自分から話しかけ、質問し、相手や相手の国の文化についての理解を深めることを心がけた。成果：今後も繋がれる現地の友達がたくさんでき、彼らの日常に根ざした文化、環境、課題など多くのことを学んだ。自分にとって、他国だったカンボジアが、友達の祖国に変わった。
- ・カンボジアの子育ての大変さをテーマに様々な人にインタビューを行った。この経験を通して、発展途上国における課題を知ることができたと同時に自分がいかに自国のことを知らないのかということについて自覚することができた。
- ・カンボジアの教育における課題を調査した結果、どうしようもないくらいの格差があることを実感した。
- ・カンボジアの教育について調査した。小学校から大学まで見学し様々な状況で学ぶ子供たちを見たが、全体的に子供に対して言えることとしては学業の重要性を知らないということだ。

- ・インタビューの際に、自分の関心分野に関して、英語力のなさによって伝わらなかったり、自分の聞きたいことが返ってこなかったりしても諦めずに質問を続けた。その結果このプログラムに参加する前よりも質問をする力が上がったと感じたし、自分の知りたかったことを知ることができた。
- ・積極的に問題意識を持ち、質問をするようにした。また、自分の主観にとらわれずに広い視野を身につけようとした。

### (3) その他

実習実施にあたり、参加学生に対して、本学からの支援に加えて、日本学生支援機構(JASSO) 海外留学支援制度(短期派遣)による支援を活用した。

## 2. センター教員担当の授業・セミナー

### 2. 1 全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ[実習]」、「平和と共生演習」、グローバル文化学環「平和と共生演習」

#### (1) 全学共通科目「NPO 入門」

本授業では、「NPO とは何か」を現場の活動に学びながら理解すること、NPO による社会問題解決の方法を、グループ・ワークや企画書の作成を通じて学び、自らの提案力、行動力を養うことを目的として授業を行った。本年度は 15 人の学生が受講した。授業前半では、市民社会や NPO に関する理論についての説明に加えて、NPO 活動の現場で活躍する方々をゲスト講師に呼びお話を伺う機会を 3 回設けた。また授業後半では、NPO の活動に不可欠なコミュニケーション能力を養成するため、学生による発表を含めて 3 回にわたって「NPO 事業計画書の作成」と題するグループワークに取り組んだ。

最初は NPO について漠然とした理解しかなかった学生も、授業における講義やゲスト講師からのお話を聴く中で、具体的なイメージを掴むことができたようであった。また、「NPO 事業計画書の作成」を通して、ミッション、ビジョン、ゴールなどに基いた事業形成の考え方や、グループでコミュニケーションを図りながら考えをまとめ、それを発表することが身に付いたと考えられる。本授業の受講を、後述の「NPO インターンシップ [実習]」の履修をする上での義務としていたが、学生がインターンに臨むにあたって NPO の歴史的経緯や理論的枠組みを把握する役割も果たしたと思われる。

また、本授業にてゲスト講師による学内公開講座を 3 回実施した。これらの講義は当該の科目履修者だけでなく当該のテーマに興味を持つ本学関係者（学生、職員、附属高校生）の聴講を受け入れた。

#### 【第 1 回】

日時： 2019 年 6 月 24 日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 209 室

テーマ：「SDGs（持続可能な開発目標）に向けた取り組み：国内の貧困問題と NPO」

講師： 大西 連氏（認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長）



※本講座はグローバル協力センター主催  
第 6 回「持続可能な開発目標（SDGs）  
セミナー」との共催で実施された。  
（詳しくは 2. 2 参照）

## 【第2回】

日時： 2019年7月1日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 209室

テーマ：「子ども食堂×SDGs」

講師： 栗林 知絵子氏（NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク 理事長）

## 【第3回】

日時： 2019年7月8日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 209室

テーマ：「NGO による途上国における教育支援」

講師： 加藤 真希氏（NPO 法人日本国際ボランティアセンター アフガニスタン事業 担当）

## （2）リベラルアーツ（LA）科目生活世界の安全保障 23「NPO インターンシップ〔実習〕」

本授業は、本学において 2003 年から文理融合リベラルアーツ科目の一つとして行われている実習形式の授業である。実習生は、本授業を通じて、自らが選択した受け入れ団体となる NPO で年間最低 60 時間のインターンシップ（体験就業）を行う。本年度も、学生が NPO の活動に実際に参加し、その意義、役割、抱えている課題を実地に学ぶこと、社会活動の中で大学での学習・研究の課題を発見すること、将来にわたる社会と自分の関わりを考えるきっかけにすることを 3 点を目的に行われた。なお、本授業を履修するには、上述の講義「NPO 入門」を受講する必要がある。

本年度は、3 団体で学生 4 人（2 年生 3 人、3 年生 1 人）が実習を行った。受け入れ団体は、自立生活サポートセンターもやい、えこお、シャンティ国際ボランティア会、の 3 団体である。各団体に取り組む分野は、貧困対策、青少年育成・地域振興、国際協力など、多岐に渡った。

個人面談などを通じて、実習生が、自身の関心のある分野について理解を深めてゆく様子や、時としてうまくいかず葛藤しながらも成長してゆく様子などが垣間見られた。そうした一つ一つの挑戦や葛藤が、実習生の今後の糧になることが見込まれる。

今後、実習生が、NPO でのインターン経験を学業や研究において活用したり、将来の仕事を選ぶ際の材料としたり、また、どのようなライフステージにおいてであれ社会との関わりを考える際の助けとすることが期待される。

2020 年 1 月 25 日には、実習の集大成として最終報告会を実施した。学生を受け入れてくれた NPO 指導担当者の参加も得て、活発な意見交換が行われた。

日時： 2020年1月25日（土）9：30～11：00

場所： お茶の水女子大学 国際交流留学生プラザ3階セミナー室

テーマ：「2019年度NPOインターンシップ学生実習報告会」

講師： 田中 悠輝氏（特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい交流事業  
担当スタッフ）

### （3）全学共通科目「平和と共生演習」「平和と共生」実践演習」

2015年9月の国連総会で、今後の国際社会、また開発途上国、先進国を含む各国の社会の方向性を考えるためのマイルストーンである「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」が採択された。同アジェンダ・目標は、「貧困の撲滅」を中心的な課題に据え、「飢饉の終焉」「健康な生活」「包摂的かつ質の高い教育」「ジェンダー平等」「人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）」「各国内及び各国間の不平等の是正」「平和で包摂的な社会」等17の目標に掲げている。

本授業では、SDGsが取り上げる以下のテーマについて、現場の状況を理解するための文献・資料を取り上げ、それぞれのテーマがどのように捉えられているのか、また、それぞれのテーマ同士がどう関係しているのかについて、プレゼンテーション、議論を通じて考察を深めた。また、援助を含め、どのような対応が可能なのかについても、ケーススタディを通じて議論を行った。

飢饉、貧困

労働移動、外国人労働者

教育、保健

不平等

特に現場の視点を持って考えていくことを重視し、以下のような現場の声を聴く機会も設けた。

日時：2019年6月4日（月）15：00～16：30

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟1号館401室

テーマ：「途上国の女子教育・ノンフォーマル教育を考える：パキスタンの現場から」

講師：大橋 知穂氏 JICA 専門家（パキスタン・ノンフォーマル教育）

### （4）グローバル文化学環「国際協力特論」

現在、貧困や格差の問題は、途上国にとどまらず、日本において、また、世界的な課題となっている。本授業では、途上国における貧困・格差を中心的な課題として取り上げ、貧困・格差の現れ方やそこに含まれる問題について理解を深めるとともに、貧困・格差が、経済成

長、教育・保健とどのように関係しているのかを検討した。これらの課題についての途上国に関するいくつかの文献を取り上げ、講義、文献講読、プレゼンテーション、議論を通じて、途上国の貧困・格差について理解を深めるとともに、日本の問題とも共通する、その背景や構造的な要因にも目を向けた。また、産業開発、雇用、教育、保健の政策や取組が、貧困・格差とどのように関係するのか、これらについての異なる対応がどのような結果につながっているのかについて理解を深めた。

以上を踏まえ、貧困・格差、教育・保健といった課題に対して、援助が果たす役割と限界についても具体的な事例に基づき、考察を試みた。

また、以下の通り、途上国の現場で活躍する専門家から、直接話を聞く機会を設けた。

日時：2019年12月23日（月）13：20～14：50

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟1号館402室

テーマ：「途上国の女子教育・ノンフォーマル教育を考える：パキスタンの現場から」

講師：大橋 知穂氏 JICA 専門家（パキスタン・ノンフォーマル教育）

※本授業はグローバル協力センター主催第7回「持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」との共催で開催された。（詳しくは、2.2（3）参照）

以上のような多角的な情報と考察は、貧困や格差の問題についての、途上国の社会や経済に根差した理解につながった。

また本授業では、日米の他大学の学生との議論を深めるため、Collaborative Online International Learning(COIL)授業を実施した。COIL 授業の概要は以下の通り。

#### 1) COIL 授業の実施概要

パートナー大学・担当教員・対象授業・ゼミ

大学・教員	対象授業・ゼミ
Ochanomizu Univ. Chisa Hara	Class on development and international cooperation, 2-4 <sup>th</sup> grade, 20 students
Sophia Univ. Komatsu Taro	Seminar on Education and International Development, 3 <sup>rd</sup> grade, 7 students Seminar on sociological perspective of education and International Development, 2-4 <sup>th</sup> grade, 7 students
Loyola Marymount Univ.(LMU) Bernadette Musetti	Seminar on education & the public goods, 1 <sup>st</sup> grade

## 2) 授業の進め方

途上国の教育の課題に関する文献講読 (大学別)

→アジア、アフリカで教育分野を中心に、20年間にわたってNGOで活躍している人へのインタビューの動画の視聴 (\*) (11月4日)

→フェイスブックへのコメントの掲載 (11月11日)

(\*) 20分のインタビューの動画。LMUの教員が作成。内容は、1990年以降の途上国の教育の変化と課題、「多様性」のもつ多様な意味、気候変動と教育、SDGsの意義、国際協力の仕事、等。

## 3) 議論のテーマ

学生は予め設定された以下のテーマ・リードクエスチョンを踏まえ、コメントを掲載する。

access to and quality of education
1. How can access to education be improved in the developing world? What are the areas that the international community and governments need to work on more?
2. How can different agencies (UN agencies, NGOs, bilateral agencies, governments (central and local), local communities, business enterprises, volunteers, etc) work together to improve the access and quality of education in developing nations?
3. What does the “quality” of education mean?
Education and sustainable development
1. How can diversity be an asset in promoting SDGs?
2. How can education address issues around climate change and climate refugees effectively?
3. Why are inclusiveness and equity important in sustainable development?
Career in education and development
1. What are the challenges and advantages of diversity within an organization that provides international aid?
2. What are the skills and disposition advantageous to working in international development?
3. Would you like to work in international development, particularly in education? Why?

## 4) 特に議論が集中した内容

〈教育へのアクセスと質〉

- 今の教育に期待されるのは、変化する社会に対応する能力を身に付けることであるが、その内容は明らかではない。そのような中、途上国のみならず、先進国におい

ても、旧態以前とした試験のための教育が行われている。

#### 〈教育と持続的開発〉

- ▶ 先進国は途上国と比較して一般に、より多くのエネルギーを消費し、より多くの二酸化炭素を排出している。そのような中で、持続可能な開発を進めるためには、一部の国・地域（先進国）が優位にならない包摂性と平等性の視点が不可欠。また、多様な人々の視点が不可欠。
- ▶ 変化の大きい今の社会では、教育内容の多様性が求められている。また、ある国で起こったことが、他の国に影響することから、他国の生活や文化に目を向ける教育が必要。他の国のことを理解する上で、教育における包摂性と平等性が重要。

#### 〈国際教育協力におけるキャリア〉

- ▶ 国際協力において、国際的に共通する価値とローカルなニーズのどちらも重要である。例えば、女子教育に関して、国際的な価値はこれを推進するが、ローカルには賛同とともに、抵抗も見られる。国際 NGO とローカル NGO の協働が、両方の価値を踏まえた国際協力を可能にする。

### 5) 学生の感想

- ・最初は、自由にコメントすると言われても、何を書けばよいかわからなかった。求められている「答え」は何なのか、間違ったことを書くといけない、ということが先に立ち、自由に発想するのが難しかった。
- ・LMU の学生が、自由にコメントしているのを見て、自分の関心に沿ってコメントすればよいということが分かった。
- ・自分なりの論点を探して、自分の意見を英語で人に伝わるように書くという経験は新鮮だった。
- ・自分のコメントに LMU の学生や教員からコメントが来ると、やり甲斐を感じるしさらに考えを深めることができた。

### 6) 成果

- ・学生は、自分なりの論点を探して、自分の意見を英語で人に伝わるように書くという経験をした。
- ・LMU の学生は、自身の関心に沿って、自由にコメントを出しているのに対して、お茶大、上智大の学生は、議論に沿ったコメント、議論に貢献するコメントを出そうとする傾向があるように見受けられた。
- ・フェイスブック上ではあるが、海外の学生との間で、議論の仕方の違いを経験するよい機会となった。on-line（会話）で同様の議論をするのは、難しいのではないかと思われる。その意味で、フェイスブックでの議論が有効だった。



インタビュー動画の視聴



フェイスブックへのコメントのアップ

## 2. 2 持続可能な開発目標 (SDGs) セミナー

### (1) 実施概要

#### 第 6 回

日時・場所：2019 年 6 月 24 日（月曜 13:20～14:50）、於本館 209 室

演題：「SDGs に向けた取り組み：国内の貧困問題と NPO」

講師：大西 連氏 認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい理事長

※全学共通科目「NPO 入門」の履修生は、授業の一環として受講。

#### 第 7 回

日時・場所：2019 年 12 月 23 日（月曜 13:20～14:50）、於共通講義棟 1 号館 402 室

演題：SDGs（持続可能な開発目標）に向けた取り組み：「途上国の女子教育・ノンフォーマル教育を考える：パキスタンの現場から」

講師：大橋 知穂氏 JICA 専門家（パキスタン・ノンフォーマル教育）

※グローバル文化学環「国際協力特論」の履修生は、授業の一環として受講。

### (2) 参加者数

参加者のべ人数：48 人

内訳：第 1 回約 25 人、第 2 回約 23 人

### (3) 内容

「持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals)」とは、2015 年 9 月の「国連持続可能な開発サミット」(於ニューヨーク国連本部)において採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」中に掲げられる 17 の目標のことである。本セミナーでは、SDGs に取り組む専門家を国際機関、政府機関、NGO などから招聘して、様々な地球規模課題について多面的に検討した。

第6回セミナーでは、認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやいの大西連理事長をお招きして、「SDGsに向けた取組み：国内の貧困問題とNPO」と題するセミナーを実施した。

冒頭、大西理事長より、自立センターサポートセンター・もやいの名前は「舩（もやい）結び」という固いけれどもほどけにくい綱の結び方に由来しているとのお話があり、団体のミ

ッションとして人のつながり作りを重視しているとのお話があった。また、SDGsは「国際貢献」と「国内実施」の両側面があり、粛々と国内実施を進めることがSDGsの達成に資する一方で、国際的に目標として掲げられていることで国内実施の推進のきっかけになる側面もあるとの説明があった。

その後、日本の貧困問題について、統計資料やエピソードなどを交えながら詳しくお話があった。現在の日本では、非正規雇用の増加などにより社会全体の低所得化が進行しており、子どもの貧困も着実に広がっているとのことであった。貧困の度合については、飢餓に直結するといったものではなく、子どもに代えの靴が一足もない、一年に一度も旅行に行けないといった事例がみられ、周囲が気付きにくいところに特徴があるとのことであった。課題として、低所得の家庭では子どもの進学率が下がるなどの影響があり貧困の連鎖が見られること、生活保護を受けづらくさせるスティグマが日本には存在すること、実態上、生活保護を受けている家庭の子どもは大学に行けない前提で社会保障の制度設計がされているという問題があることなどが挙げられ、広範な取組が求められるとの考えが示された。

最後に、SDGsに掲げられているように、どうやって貧困を半減させるのかは大変難しい課題だが、様々なレベルで取り組みを進めて行く必要があるとの言葉で締めくくられた。

第7回セミナーでは、国際協力機構（JICA）国際協力専門家（教育）の大橋知穂氏をお招きして、「途上国の女子教育・ノンフォーマル教育を考える：パキスタンの現場から」と題して実施した。ゴール4「包摂的かつ公正な質の高い教育・生涯学習」を取り上げ、パキスタンのノンフォーマル教育、識字教育、女子教育についてお話をうかがった。



講師の大西理事長



講師の大橋知穂氏

パキスタンは、非識字率が 42%と高く、特に農村女性の非識字率は 64%と高い国である。

最貧困層の家庭では、家族のだれも字を読めない、また、家に字が書かれたもの（新聞、本、カレンダー等）がほとんどない、ということも珍しくないようだ。

女子の教育に対する意識も低く、「女の子は結婚して家を離れるので、教育にお金をかけるのは無駄。」と考える人が少なくないということだ。

そうした中、基礎教育の一環であるノンフォーマル教育は、特に農村の子供、学校に行かなかった成人が小学校レベルの教育を身に付ける場となっている。

ノンフォーマル教室へ行って、読み書き、計算ができるようになることで、生活が便利になることに加えて、人々は、自分に自信を持てるようになった、家族やコミュニティから認められようになった、と感じているようだ。

ノンフォーマル教室に行ったことで、将来に夢や希望を持てるようになったという声も聞かれるそうだが、「人生を切り拓く」という教育が本来持つ力を目の当たりにしたようだ。

プレゼンテーションには、ノンフォーマル教室で学んだ人々の実際の意見や写真が豊富に含まれ、ノンフォーマル教育の実際、またノンフォーマル教育が果たす役割について、理解を深めることができた。

#### （４）その他

第 6 回、第 7 回セミナーの他に、9 月 21 日、22 日に難民支援協会が主催した「難民アシスタント講座」に難民問題に関心のある学生 3 名が参加した。持続可能な開発目標（SDGs）が掲げる「誰一人取り残さない」世界の実現のためには難民が取り残されることのない活動が求められる。同講座への参加は、日本と海外の難民問題への取り組み方針、取り組みの実際、法制度、難民の方のお話など、難民について知り、考える機会となった。

以下、参加学生によるセンターホームページ報告

#### 「難民アシスタント養成講座」参加報告

「難民問題。それは難民自身の問題ではなく、難民を受け入れる側の問題であり、私たちの問題である。」

今回の講座で印象に残った数々の言葉の一つです。

2019 年 9 月 21-22 日、明治大学リバティタワーで開催された難民支援協会（Japan Association for Refugees : 以下 JAR）が主催する難民アシスタント養成講座<40 期>に参加させていただきました。3 連休中ながら、約 90 名もの学生や社会人が参加しており、関心の高さがうかがえました。2 日間に渡る講義では、JAR 理事長、理事、スタッフ、弁護

士の方などの専門家の方々や難民の方から直接ご講義いただきました。トピックは、日本の難民支援の現状について生活支援から法的支援、日本の移民政策、海外での受け入れ事例とトレンド、そして私たちに何ができるのか、など多岐に渡ります。

毎日のように現場と携わっている専門の方や当事者である難民の方のお話からは、過酷な現場の様子が語られました。あまり知られていませんが、難民申請中の難民は、親戚や知り合いがいない限り、住むところもなく、働くこともできず、食べることもできないホームレスの状態に陥ります。難民申請は長くて10年かかることも。また認定されるには、書類を山ほど準備して、なおかつ全てに日本語訳をつける必要があります。翻訳はボランティアで協力してくれる人を見つけられない限り、かなりのお金がかかります。それでもなお、無事に認定される可能性は1%以下。先の見えない不安を何年も何年も抱え続ける彼らの苦悩は計り知れません。

特に、弁護士の方がお話された収容所の現状は衝撃そのものでした。収容所とは、VISAや在留資格を持たない外国人やオーバーステイしてしまった外国人が収容される施設です。ほとんどの方が無期限収容で、そこでは医療が行き届かず、精神的にも参ってしまい、自ら命を落とそうとする人もいます。難民は必要な書類を持たないで入ったのではなく「持てない」状況で命からがら母国を逃げてきたことを忘れてはいけません。

一方で、難民の受け入れに成功している国の例も紹介されました。難民を社会統合の視点から考え、社会の負担ではなく社会に大切な人材として語学や職業訓練、定住支援を行う国もあります。その他、メンターを養成し難民の方を全面的にサポートするような制度を実施している国も紹介されました。日本も応用できるような良い事例が沢山あることも新しい発見でした。

昨年日本で受け入れられた難民は、たった24人。しかし、世界には7,080万人もの難民がいます。さらにその半数以上が子どもや女性です。もちろん多くの難民を受け入れることは簡単なことではありませんし、解決しなければいけない難しい問題がまだまだ残っています。しかし私たち市民レベルでできることもたくさんあります。

まずは、彼らのストーリーに耳を傾けてみませんか？日本で生活していると、難民問題は自分とかけ離れているように思われるかもしれませんが、JARが公開しているウェブマガジン「ニッポン複雑紀行」には日本に住むたくさんの方の難民の声が寄せられています。厳しい現状だけでなく、日本で受け入れられたことで幸せに暮らせるようになった、日本に感謝している、などのポジティブな言葉も並んでいます。読んで現状を知るだけでも、難民問題を少しだけ、自分に寄せて考えてみる機会になると思います。

今回の講座で、私自身もともと難民問題に関心はあったものの初めて知る事実が多く、心揺さぶられるようなお話を最先端で活動されている方から伺うことができたのは大変有意義な時間になりました。また2日目の最後のディスカッションでは、関西から夜行バスでやってきた同学年の学生をはじめ、無料低額診療事業に携わるお医者さんなど、様々な年齢層や背景をもつ方と意見を交換することができたのも良い経験になりました。

難民問題にますますの危機感を感じたとともに、日本でもより多くの方が認知し、自分ごととしても問題意識をもつ必要があると強く感じています。また、本講座で自分が見聞きしたことを周りの人にも共有するとともに、翻訳のお手伝いをはじめ自分にできることから行動に移していこうと思います。

貴重な機会をいただいたこと、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

(文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 3年 大山 可乃)

### 3. 海外調査支援

#### (1) 実施概要

##### 1) 目的

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」事業の一環として、本学大学院博士課程（前期・後期）学生による途上国開発、国際協力に関する現場に根ざした調査研究を支援するため、公募により選定された海外調査への支援を行う。

本事業は、以下の2つからなる。

- ①「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」の一環として、平成23年度から実施している海外調査支援。
- ②平成24年、卒業生故野々山恵美子様の遺贈により、アフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国を対象とした調査、研究、実践のために設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」により平成25年度より実施している開発途上国における女子教育分野の海外調査支援。

##### 2) 対象分野

- ①持続可能な開発目標の17ゴールに関連するテーマ（「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」）  
2015年9月に国連で採択された先進国、開発途上国を含む普遍的な政策目標である「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals : SDGs）の17ゴール（以下）のいずれかに関連するテーマ。

ゴール1. 貧困撲滅	ゴール10. 各国内及び各国間の不平等是正
ゴール2. 飢餓の終焉・栄養改善	ゴール11. 包摂的かつ持続可能な都市及び人間居住
ゴール3. 健康な生活	ゴール12. 持続可能な生産消費形態
ゴール4. 包摂的かつ質の高い教育	ゴール13. 気候変動の軽減
ゴール5. ジェンダー平等・女性女児の能力強化	ゴール14. 海洋保全
ゴール6. 水と衛生	ゴール15. 持続可能な森林管理、砂漠化への対処、生物多様性保全
ゴール7. 持続可能なエネルギー	ゴール16. 平和で包摂的な社会の促進
ゴール8. 包摂的かつ持続可能な経済成長・人間らしい雇用	ゴール17. パートナーシップの強化
ゴール9. 強靱なインフラ・包摂的かつ持続可能な産業化	

- ②開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ（野々山基金）

### 3) 支援内容

20万円を上限として航空運賃、ビザ代、海外の調査地での宿泊費、その他センターが必要と認める費用を本学およびグローバル協力センターの規定により支給する。これらの費用の総額が20万円未満の場合は実費、20万円以上の場合は20万円を支給する。

### 4) 選考結果

「持続可能な開発目標の17ゴールに関連するテーマ」

氏名	所属	調査期間	調査先	テーマ
永井 萌子	ジェンダー 社会科学専攻 M2	2019/7/30 ～10/8	パリ (フランス)	フランスにおけるクィアマイ グレーションと「黒人LGBT」 の日常実践—サハラ以南ア フリカ諸国出身者を対象に—

「開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ」

応募なし

※本募集において、採択がなかったSDGs 2名枠、女子教育等3名枠については、10月に再募集を行った。3名の応募があり、書類審査、面接を実施したが、全て基準点未満のため、採択はなかった。

### 5) 成果

調査結果について報告書を作成し、センターホームページにて公開した。また、人文地理学会において、研究発表を行った。

本調査支援は修士論文作成のためのフィールドからの情報収集・調査に活用された。学内報告会については、2020年度春の募集説明会とあわせて実施予定である。

### 6) その他

2017年度「途上国開発・国際協力分野国際調査支援」を受けた山口紀子さん（大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻）が、2019年10月26日に開催された第55回お茶の水女子大学日本言語文化学研究会にてポスター発表を行い、佐々木嘉則（佐々貴義式）賞を受賞した。題目は、「孤立環境キルギスにおける日本語学習／教育の意味とは何か—教師21人への半構造化インタビューの結果から—」。

## (2) 調査報告書要約

### フランスにおけるクィアマイグレーションと「黒人 LGBT」の日常実践

#### —サハラ以南アフリカ諸国出身者を対象に—

Us, being Black and LGBT through everyday practice:

A case study of 'queer migration' towards France from Sub-Saharan Africa

大学院人間文化創成科学研究科

ジェンダー社会科学専攻 M2 永井 萌子

#### 【要約】

本研究は、サハラ以南アフリカ諸国出身の LGBT 難民がホスト社会であるフランスにおいて、いかに彼らが持つ黒人性や同性愛者性といった複数のマイノリティ性とともに、社会に統合されていき、時にはその社会制度のなかで彼らなりの「日常実践」をもって「抵抗」を可能としているのかを見ていくものである。

本研究における LGBT 難民とは、「LGBT<sup>1</sup>」としての生活が困難なために出身地を離れ、フランスにたどり着いたものたちのことである。難民申請を始めると同時に、出身地ではなくホスト社会の一市民としての彼らの生活は始まる。他方で「LGBT」としての彼らは、「いかにアフリカ人であり続けながら、自らの同性愛を生きるのか」<sup>2</sup>を問い、ホスト社会のものでなく出身地のものでなく、フランスにいる「アフリカ人」としての自己を形成していく。支配文化に包摂されているからこそ生じる彼らの日常実践をみていくことで、近年急増している LGBT 難民の現実を、どのような支配文化が彼らの抱える問題を作り出し、またその問題はいかにして解決または改善の余地があるのかを考えていく。

#### 注

1. 「LGBT」という言葉をあえてここで用いる理由は、それが「支配文化」に包摂された彼らの今の立場であることを表すためである。対して国家等で共有された固有の言葉としてではなく、特定の定義を持たず、その抽象性こそが論点となるような場合にはクィア、およびクィアネスを用いる。
2. アフリカの虹の活動理念でもあり、毎回集会の始まりに問いかけるものでもある。

#### 4. 大学間連携イベント

##### 4. 1 「被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支援～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」

###### (1) 実施日時・場所

2019年6月29日（土曜日）10:00～17:00

国際交流留学生プラザ（多目的ホール）

###### (2) 目的

近年、日本を含め、世界的に自然災害が多発し、長期にわたり避難所等で不自由な生活を送る人々が増加している。また、多発する紛争により、生活の場を追われ、難民キャンプ等での生活を余儀なくされる人々も増加している。

自然災害や紛争から避難した人々への人道・緊急支援は、国家や国際機関、NGO等に加え企業、個人等によって、様々な形で行われているが、支援をする側は、往々にして、人々のニーズに合致しない援助をしたり、一方的な「善意の押しつけ」と考えられるような事態を生じさせてきた。この背景には、支援者と被災者の間に不均衡な力関係が存在することや、それに付随して被災者を中心に据えた支援が軽視されてきたこと、および、支援者側の連携不足等が存在する。こうした問題は国内の災害時の避難所においても見られる。

最近になり、このような事態を改め、支援計画や内容に対し、被災者・受益者側が要望・苦情を提起する機会を設けることなどを通じて、アカウンタビリティ（説明責任）を確保しようとの考えが広まってきた。こうした最近の動向の根幹にあるのが、今回のワークショップで取り上げる人道・緊急支援のための国際基準である。こうした考え方は、国内の災害対応においても重視され、報道においても取り上げられていることもあり、人道・緊急支援関係者のみならず、広く一般の関心を集めている。本ワークショップでは、人道・緊急支援に関する国際基準に初めて接する学生を対象に、同基準の背景にある原則や考え方、現場のニーズに即した支援について学び、国内の災害援助のあり方、また、海外における人道・緊急支援のあり方について、広く考える機会とする。

###### (3) 参加者 23人（参加申込数24人、うち当日欠席1人）

- ・お茶の水女子大学学生（18人）
- ・奈良女子大学学生（5人）

###### (4) 講師

「支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク（JQAN）」（※注2）

五十嵐 豪氏（AAR Japan 所属）、福田 紀子氏（清瀬市男女共同参画センター所属）

## (5) プログラム概要

トピック	実施形態
架空の支援事例の問題抽出	グループワーク
人道支援の歴史、原則	講義
支援の質向上のための9つのコミットメント	講義・グループワーク
架空の支援事例の改善策の検討（寸劇と議論）	グループワーク

## (6) 成果

### 1) ワークショップを通じた学び

・ワークショップの冒頭、架空の支援の事例を取り上げ、具体的な問題（村長の話だけで支援の対象地域を決めてしまう、支援の情報へのアクセスが限られる女性たちが支援物資を受け取れない、そうした結果、被災者から不満がでてくる、等々。）を見ていくことで、人道・緊急支援の課題について、具体的なイメージを持つことができた。

・こうした課題は、人道・緊急支援にとどまらず、援助全般にも共通するものであり、援助の課題について考える上でも参考になった。

・スフィア・スタンダードが、1994年のルワンダ虐殺後の人道支援の失敗への反省から、開発されてきたこと、人道危機と支援の歴史の紹介があり、大局的な視野を持つことができた。

・スフィア・スタンダードの根源にある人道支援の考え方や、支援の質を高めるために必要な9つのコミットメント（ニーズにあった支援、被災した人々が支援内容の決定に参加し、また、正当な要望や苦情を訴えることができる、等）について、理論を学ぶとともに、理論に基づき、冒頭の問題の多い架空の支援事例の改善策を考え、これを寸劇にして発表した。自分たちが支援者、被災者の役割を演じることで、様々な問題に気づくことができた。（被災コミュニティの人間関係の尊重、支援の質を向上させる際の受益者の役割の重要性、等）

・2名の講師は、国内外の人道・緊急支援の現場での豊富な経験を有しており、現場での課題（支援が被災者間の対立を生むことがある、支援の現場でのジェンダーに基づく暴力の問題、等）について、率直な意見を聞くことができた。

・本ワークショップは、日本で多発する災害を踏まえ、タイムリーな内容であった。

### 2) 参加者の感想

・今後、自分が支援する側になるかもしれないし、支援を受ける側になるかもしれない。今回のワークショップでは、そうした場面で何が必要かについて、学ぶことができた。

・災害時の支援は、被災者の役にたつ一方で、被災者の間に争いを生み出す可能性もあることがわかった。

・講師の方の人道緊急支援の現場での実際のご苦労や失敗に基づくお話は、なかなか知

ることができない貴重なお話だった。また、お茶大の他の参加者、他大学の参加者との議論を通じて、多様な経験、考え方を知ることができ、学ぶことも多かった。

(※注1)

「スフィア・スタンダード」とは、1997年、人道援助を行う NGO のグループと国際赤十字・赤新月運動によって開始された「スフィア・プロジェクト」の成果物。人道支援の現場において支援者が守るべき最低基準を指す。人道支援における主要な支援分野である「給水と衛生」、「食料の確保と栄養」、「避難所／キャンプ等と生活必需品」、「保健活動」などを網羅しており、特に、子ども、女性や高齢者、特定の疾病や障害を持った人など、社会的により弱い立場に置かれがちな人たちが支援を受ける権利を持つことを重視している。

【参考 URL】 <https://www.refugee.or.jp/sphere/>

紛争・災害時の教育支援に関するスタンダードとして、「緊急時の教育のための最低基準 (INEE ミニマム・スタンダード) (Inter-Agency Network for Education in Emergencies) がある。同スタンダードについては、2010年改定版に当たり、本学国際協力論ゼミが邦訳している。

【参考 URL】 <http://www.cf.ocha.ac.jp/archive/cwed/publications/inee2010j.pdf>

(※注2)

「JQAN (Quality & Accountability Network in Japan)」とは、2015年7月に設立された、質が高く、受益者に対しアカウンタビリティを果たす緊急人道支援の実践に向けて活動するネットワーク。人道支援における質や説明責任に関する情報収集と発信、研修の企画・実施等を行う。幹事団体は、(特活) 難民を助ける会 (AAR Japan)、(特活) 国際協力 NGO センター (JANIC)、(特活) CWS Japan、(特活) ジャパン・プラットフォーム、(特活) 難民支援協会 (JAR)。【参考 URL】 <https://jqan.info/about/>



#### 4. 2 『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方

##### (1) 実施日時・場所

2019年7月6日(土曜日) 10:00~17:00

本館カンファレンスルーム (135室)

##### (2) 目的

国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」(※注)について参加学生が学ぶとともに、このような対話法を用いることで、現場に存在する根本的なニーズの把握が可能となり、その結果、外部者による援助の在り方に影響を与えるということを経験し理解することを目的とする。また、将来的には、参加者各人の学習・研究・実践の様々な場面で応用できるようになることを目指す。

平成27、29、30年度と本ワークショップを実施し、フィールド調査を実施する学生にとって多くの重要な内容を含むものであったことから、今年度も実施したものである。

※注:「対話型ファシリテーション」とは、開発途上国の人びとの生活の改善を目指す国際協力活動の場で、当事者と協力者が対等な関係をつくり、当事者による課題発見・解決を促す実践的な手法。

##### (3) 参加者 22人(参加申込数23人、うち当日欠席1人)

- ・お茶の水女子大学学部生 15人、大学院生 1人、卒業生 1人
- ・奈良女子大学学部生 5人

##### (4) 講師

前川 香子氏(特定非営利活動法人ムラのミライ 海外事業チーフ)

##### (5) プログラム概要

インド、ネパール、セネガル、飛騨高山で地域資源を生かしたコミュニティづくりに取り組むNPO法人ムラのミライの海外事業チーフであり、インドなどにおいて農村開発や住民主体の自然資源マネジメント等に長年携わってきた前川香子氏を講師にお招きした。

ワークショップでは、開発途上国の現場におけるフィールドワークの考え方と進め方について、ムラのミライの経験に基づき、具体的なイメージが持てるような内容が提供された。ムラのミライが実際に直面した、農村等における支援ニーズの把握において、援助者と被援助者の関係性の中で答えを誘導してしまい、その結果、ニーズに基づかない支援を行うという経験と、それへの対応として開発された「対話型ファシリテーション」(対話を通じて、当事者による課題発見・解決を促す実践的な方法)について、講義を受けるとともに、グループワーク等を通じてどのように質問を展開するのがよいのかを実際に体験した。

## (6) 成果

### 1) ワークショップを通じた学び

ムラのみライの途上国での失敗談を含む経験や実際に質問を展開するグループワークを通じて、以下のような点について理解が進んだ。今後、途上国に限らず、フィールド調査を行う学生にとって参考になる、具体的な内容であった。

- ・ NGO（支援者）と村人（被支援者）、外国人とその国の人、といった関係性の中で、村の生活状況についての事実関係を質問しているつもりであっても、一定のバイアスがかかってくる。（例：村の生活状況に関する質問に対して、支援に関する内容が回答される、「脆弱な村人」というイメージの回答がなされる、等。）

- ・ 上記は、先進国対途上国という力関係を前提とした関係性に陥りがちであるということにも通じる。

- ・ 相手の考えを聞く質問をした場合、上記のような関係性が反映され、ステレオタイプの村人のイメージ（脆弱で依存した農民）が共有されるということが、起きてくる。

- ・ しかし、事実関係についての質問を重ねる（例：旱魃で仕事が減っている農業労働者に対して、「一番困っていることは何ですか？」ではなく、「それでは今、何をしていますのですか？」と尋ねる。）ことを通じて、ステレオタイプにとらわれない村人像を捉えることが可能になる。

- ・ バイアス、ステレオタイプに捕らわれないためには、事実に関する質問を重ねていくこと、また相手の立場にたって、相手が話したいことを質問していくことが重要である。

- ・ 参加者は、お茶の水女子大学の学部生等と奈良女子大学の学部生が参加し、グループワークで多様な意見が交わされた。またこれまでの経験等について意見を交換する機会となり、刺激となった。

### 2) 参加者の感想

- ・ 途上国の人と自分たちの間には、意識していなくても、「途上国の人」「先進国の人」といった関係性があること、また、そのことによって、質問や回答にバイアスがかかってくる、というお話は参考になった。

- ・ 途上国の農村の生活の写真をもとに、設定したテーマ（女子の暮らし、男女の役割の固定化）等について質問を考えるグループワークでは、はじめはなかなか質問が出てこなかったが、他の人の質問を聞くことで、自分も質問が浮かんでくるようになった。



## 5. 「共に生きる」スタディグループの活動

平成 23 (2011) 年度に発足した「共に生きる」スタディグループは、学部・学年にかかわらず平和構築と国際協力、ボランティア活動等に関心をもつ学生が参加し、自主的な活動とその成果を発信している。

2019 年度は、4 月に 2 回および 10 月 31 日、11 月 14 日に説明会を開催して新規メンバーの参加を呼びかけるとともに、途上国の教育支援、難民支援を実施している学生グループの活動紹介、及び 2019 年度内閣府「国際社会青年育成事業」メキシコ・ペルー派遣団参加報告を行った。年間を通じて、学生有志による展示、途上国支援の報告セミナー、ワークショップなどが実施され、学生による国際協力実践を推進するとともに、ホームページを通じてグローバルな課題へのキャンパスでの実践について発信した。



SFT による活動紹介



フェアトレード商品徴音祭での販売活動紹介



OCHANAN による活動紹介



2019 年度内閣府「国際社会青年育成事業」メキシコ・ペルー派遣団参加報告

## 5. 1 学生自主活動

以下、学生が作成した活動に関するホームページ記事を掲載する。

### (1) STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2019 年度活動報告

私たちは、「勉強したいと願うすべての子どもたちが勉強できる世界に」「大学の教科書をより安価に購入できることが当たり前の世界に」という理念のもと、大学生から使わなくなった教科書・書籍を寄付していただき、それを約半額で再販売し、得た収益をラオスとバングラデシュの子どもたちの教育支援に寄付をするという活動をしています。

お茶大支部は 2012 年より、「共に生きる」スタディグループの一員として学内での活動をしております。今年度も、学生の皆様に向けた活動紹介や微音祭でのポスター展示をさせていただきました。そのおかげでメンバーが増え、現在は 1～3 年生合計 11 人で活動を展開しております。また今年度は支部の目標に「伝える・繋ぐ・楽しむ」を掲げ、お茶大生に STUDY FOR TWO の活動を知っていただき、お茶大生と途上国の子どもたちを繋げることで、そして私たちが楽しみながら活動をすることを目指しました。



10月の教科書・書籍販売の様子

私たちは、学生の皆様に、いらなくなった教科書・書籍を学内と学生寮の合計 7ヶ所に

設置しているボックスへ入れていただく形で、教科書・書籍を寄付していただいています。また今年度も、4月と10月の学期初めに2週間ずつ、中古教科書・書籍の販売イベントを附属図書館前で行いました。11月に行われた微音祭では、これまでに寄付していただいた本のうちの教科書以外の読み物を、フリーマーケットのブースで販売しました。たくさんの方にご協力いただき、これらを合計した今年度の合計寄付金額は 346,650 円となりました。10月の販売での売り上げは全国に約 50 ある支部の中で 5 位にあたるもので、関東地区では 1 位となりました。

教科書・書籍の寄付、購入をしてくださったお茶大生の皆様、またご協力いただきました全ての方に感謝申し上げます。今後もお茶大生に身近な国際協力の場を提供すること、長期的に途上国の子どもたちを支援することを目指し、支部員一同頑張っております。どうぞよろしくお願いいたします。



微音祭での中古本販売の様子

(SFT お茶大支部代表 文教育学部 2年 内藤 百合子)

## (2) OCHANAN 活動報告 (2019 年度)

OCHANAN は、お茶大生 (OCHA) が難民 (NAN) にアクションを起こすために 2016 年度からスタートした、有志メンバーのグループです。今年度は、実際の活動は限られましたが、難民について改めて学ぶことができた 1 年でした。

OCHANAN では毎年、刺繍小物の販売を通してシリアの女性たちに「針と糸」で収入の道を開く活動をされている、イブラ・ワ・ハイトさんのお手伝いをさせていただいています。今年は 9 月の梱包会に参加しました。梱包会では新作の小物が数多くみられ、シリアの女性たちの刺繍に対する意欲を感じました。実際に、作り手の方から頻繁に新しいモチーフや作品の提案がされており、難民キャンプを離れた後も刺繍を続けたいと活動している女性もいるそうです。彼女たちにとって、刺繍が生活の一部となっていることを感じました。その一方で人や機会の不足で、せっかく届いた作品を日本で捌けていないというお話も伺いました。3 月には再度梱包会があり、新年度には学内販売を企画しています。私たちにできることを今後も続けていきたいです。



「共に生きる」スタディグループ説明会  
における活動紹介



イブラ・ワ・ハイトの商品

11 月の微音祭では、今年はメンバーの都合上出店はかないませんでした。難民についてのポスターを作成し、展示しました。近年国内では難民への関心が薄まっているように感じますが、まだまだ多くの難民が日々不安を抱えながら生活していること、日本にも難民と認められず不安定な生活を強いられている人が多くいることを再認識できました。私たちのポスターをみて、少しでも難民問題を自分ごととして考えてくれる人がいれば嬉

しく思います。

年末には新たなメンバーの募集を行いました。今後の活動についてのミーティングを開いたところ、国内の難民や、外国人労働者、難民の子どもの権利等、様々な関心を持っていることが分かりました。今後も OCHANAN を、難民についてより深く語れる場所にするとともに、それぞれの課題に対してできることからアクションしていきたいです。

(文教育学部 4 年 佐橋 ひなの)

### (3) Health for Dreams 活動報告

#### 1) 学生企画「視野を広げよ、管理栄養士の卵」実施報告

2019年5月28日に、学生団体 Health for Dreams (HFD) が主催し、「視野を広げよ、管理栄養士の卵～カンボジアでの病院給食支援～」というテーマで途上国の栄養についての講演会を行いました。

国際医療 NGO ジャパンハートのボランティアスタッフとして、カンボジアの小児病院で病院給食の立ち上げを行われた、野村友彬氏を講師としてお迎えし、お話をいただきました。お話しいただいた内容は、「カンボジアの医療や栄養の現状」、「支援内容」、「現地で活躍している日本人栄養士の仕事」、「活動への想い」などについてです。



講師の野村友彬氏

カンボジアでは 1970 年代にポルポト政権による知識人の大量虐殺があり、未だに様々な爪痕が残っています。栄養もその一つで、栄養の概念がなく、栄養士がおらず、病院給食もないところがほとんどです。そのためジャパンハートさんが医療支援をされている病院では、がん治療をして免疫が弱っている子どもが、屋台で販売されている衛生的でないものを食べるため、術後の回復が遅いという問題がありました。そこで、現在は病院給食開始に向けて準備をされています。日本とは異なる栄養の現状を知って「視野が広がった。」との感想をいただきました。また、支援の内容だけではなく、野村さんのアツい想いに「感動した。」との声もたくさん聞かれました。



講演会後の記念撮影

講演だけでなく、グループワークも行いました。36 名の方にご参加いただき、大盛況のうちに終えることができました。

HFD は今年の 4 月に立ち上げたばかりの団体です。「家庭環境によって、栄養を取れていない子どもたちの現状を知り、アプローチをする」というミッションを掲げて活動をしています。

「途上国の子ども」や「日本の貧困の子ども」の栄養に関する勉強会や講演会を行っています。これからの活動も応援していただけたら幸いです。

今回の講演会につきましては、グローバル協力センターの先生方やスタッフの方に大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。有難うございました。

(Health for Dreams 代表 上山 友梨子)

## 2) 学生自主企画「途上国の栄養について知ろう」実施報告

2019年12月20日に学生団体 Health for Dreams (HFD) 主催で、「途上国の栄養について知ろう～国際栄養士から学ぶ～」という題で、国際栄養士としてご活躍されている太田旭様にお越しいただき講演会・参加者交流を行いました。

今回の目的は栄養、国際協力などに興味のある方が国際栄養の現場のお話を聞くことによって、国際栄養への興味や理解を深めることでした。太田様は青年海外協力隊員、国際協力団体などで途上国の栄養改善に関わられてきました。本などでは分かり得ない途上国の活動におけるエピソードや食事調査の方法の概要などをお話いただきました。食事調査では、誰がどこで何をどのように手に入れ、どのように調理しているかなど細かい情報を正確に得る必要がありますが、調査対象者の負担にならないように配慮しなければならないので、バランスがとても難しいなと感じました。



講師の太田旭氏



講演会後の記念撮影

今回の講演会では、アイスブレイクや講演を聞いての感想シェアなどを行い、参加者同士の交流も深まり、温かい会となりました。

ご講演を快く引き受けてくださった太田旭様、参加してくださった皆様に心よりご感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

(Health for Dreams 代表 上山 友梨子)

## (4) 国際社会青年育成事業参加報告

内閣府「国際社会青年育成事業」は、平成6年に皇太子殿下（現 天皇陛下）の御成婚を記念して開始した「国際青年育成交流事業」を2019年のお代替わりを契機に発展させた事業で、欧州・アフリカ、北米・中南米、アジア・大洋州の各地域の課題をテーマに設定し、テーマに沿って施設訪問やディスカッションを行いました。さらに、現地での様々な活動やホームステイ、帰国後に行われる国際青年交流会議を通して、海外青年や現地の方々とも交流を深めました。

私は、2019年度日本代表青年として9月18日から10月5日までメキシコ・ペルーを訪問しました。テーマが「災害対策」ということで、メキシコでは国立災害予防センターやメキシコ国立自治大学の災害救助犬養成プログラム・国立気象局、ペルーでは国家防災庁や国立工科大学の日本・ペルー地震防災センターなどを訪問しました。事前に両国の災害対策については調べて団員間で共有していましたが、現地では想定以上に研究が活発に行われて

いる印象を受けました。それと同時に各国の社会的・地理的背景によって対策方法や対策における問題点が異なっており、研究成果がうまく生かされていないことにもどかしさを感じることもありました。それでも現状をよりよいものに改善していきたいという姿勢を強く感じ、災害対策に関する明るい未来を感じ取ることができました。

メキシコとペルーでは、「災害対策」以外にもたくさんの経験ができました。

最初の訪問先であるメキシコ青年庁では、ソングレロのプレゼントや民族舞踊で溢れんばかりの手厚い歓迎があり、民族舞踊では途中で団員全員も参加し一緒に踊るなど、ラテンらしい陽気なおもてなしを受けました。おもてなし全てが、まだまだ未熟な私たちに向けたエールに感じ、「これから頑張るね」と大きく背中を押してくれたようでした。



メキシコ青年庁にて

メキシコ人は底抜けに明るく、マイペースで細かいことは気にしないという国民性のようでした。日本人一般とは真逆かもしれませんが、それが逆にうまくマッチしていたように思います。メキシコ青年は初対面時から明るく話しかけてくれ、「何を勉強しているの」「どうしてこのプログラムに参加しようと思ったの」などと質問攻めにしてくれ、話す機会をたくさん与えてくれました。その後も施設訪問やパーティー、遺跡観光を通じて、たくさんコミュニケーションをとれたことが非常に嬉しく、この経験がのちのペルー滞在や国際青年交流会議でも積極的に海外青年と交流する活力となったのだと思います。



日系人協会にて

ペルーでは、日系人協会にお世話になったこともあってか、日本人と似た国民性を多く感じ取ることができました。ペルーには日系人が約 10 万人おり、私のホームステイ先も日系の家庭でした。特に祖母は日本で働いていた経験もあって日本語がほぼ不自由なく話せ、日本語で常に会話していたのは不思議な感覚でした。現在では日本語を話せる日系人はかなり限られているものの、私のホストファミリーの兄弟 2 人は、父親が日系人で日

本語が話せない一方で日本語を自主的に学習しているようでした。また、日系人協会では日本語の習得の有無を問わず日系人同士の繋がりが強固に継続されていることがわかり、自分のルーツを今でも大事に思ってくれていることに日本人としては嬉しい限りでした。

メキシコ・ペルー人は英語の優先度が日本と近いことからか私の決してうまくない英語を特段気にすることもなく、また、はじめから陽気に分け隔てなく接してくれたことで、文化や国民性の壁を感じることもなく仲良くなることができました。帰国後の会議期間中も、自

由時間にはメキシコ・ペルー青年と成田近郊で行動を共にしましたが、国同士で固まることもなく、常に様々な青年と深く交流できたことがとても嬉しかったです。

私は、事業前にある目標を立てました。それは、「内容は二の次で良いから、とにかく発言できるようになる」ことです。事前研修時は質問を求められると即時に手が挙がる団員、英語での発表を即時にこなす団員に圧倒されました。私自身苦手意識はあったのである程度は覚悟していましたが、何も自発的に行動しなければ与えられたプログラムを受動的にこなすだけで、自分ならではの経験など得られずあつという間に時間だけが過ぎていくのではないかと。そう危機感を持った私は、この事業に参加しなければ挑戦しようと思わなかったであろう「自主的に発言すること」に挑戦しました。



国際青年交流会議での成果発表会

国際青年交流会議はこの目標に取り組む絶好の機会でした。海外青年は優秀な方ばかりで実力の差を感じ、そのような環境下で全体で発表することは勇気が必要でした。それでも私の意見を懸命に伝えると、周りは意図を汲み取ろうと努力してくれました。「私も同じことを思っていたから、発言してくれてありがとう」と言ってくれたり、私の意見の意図が伝わらなかったとき、意見を理解してくれた海外青年が、私の代わりに説明してくれたりすることもありました。私の挑戦を、たくさんの友人が手助けしてくれました。

会議後には海外青年やファシリテーターの先生に、「たくさん発言していて尊敬した」「事前研修のときはディスカッションが苦手と言っていたのに、たくさん発言できていて驚いた」と言ってもらえました。発言するかしないかの二択を迫られたときに「発言する」を選択できるようになったことは、私にとっては大きな成長です。

この事業を振り返ると、優秀なみなさんについていくのは大変でしたが、だからこそ得られた経験・自己の成長があったと思います。また、団員が少人数なことから事前準備や派遣中に与えられる各団員の役割が非常に大きく、日本紹介の係の仕事や協賛の取得など、色々な仕事を経験できたのも非常に楽しかったです。「私はもっと頑張れるぞ!」と自信を与えてくれたこの事業・事業に関わった全ての方々に感謝でいっぱいです。今はこの事業で得た経験をさらなる成長に繋げたい、周りの方々に還元したいという思いを強く感じています。

(人間文化創成科学研究科理学専攻 M1 森島 佑美)

## 5. 2 徽音祭(大学祭)における展示・発表

2019年11月9日(土)と10日(日)に開催された徽音祭(学園祭)において、「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー参加者による調査結果の発表を行った。また、「共に生きる」スタディグループ有志によるポスター発表を行い

国際協力活動に取り組むお茶大生の活動を紹介した。

## (1) スタディツアー報告

### 1) ネパールスタディツアー学生報告

2019年8月25日(日曜日)から9月1日(日曜日)の8日間、「国際共生社会論実習」・「グローバル文化学実習 I」ネパールスタディツアーが実施され、学部生8名、教員2名の計10名が参加しました。

参加者は6回の事前学習を通して「ネパールの歴史」「ネパールの民族・宗教・社会」「ネパールのジェンダー課題」「ネパールにおける再生可能エネルギーの社会的・経済的インパクト」というテーマのもと文献購読・議論を行いネパールに関する知識を得ました。また、事前学習や文献調査を通して個別に調査テーマを決定し、各自調査の準備を行いました。



学校見学の様子

現地では首都カトマンズを中心に3ヶ所を訪問しました。まず、ジェンダー専門家のお話、お茶の水女子大学 OG

との会食、在ネパール日本大使館、JICA ネパール事務所、AEPC (代替エネルギー促進センター) 本部、NGO サルタックでは事業の説明やネパールの現状をうかがい、多岐にわたる視点でネパールに対する理解を深めました。また、JICA 事業地の公立学校、NGO サルタックの学校での活動、農村部のラメチャップ郡とカブレパランチョーク郡の AEPC 事業地を訪問し、現地の方の生活を肌で感じました。さらに AITM (Asian Institute of Technology & Management) では同年代の学生と相互プレゼン・グループ交流を行い、若者目線でのネパールの現状についての意見を聞く機会を得ました。

現在カトマンズでは多くの子どもが大学進学を見据えて教育を受けています。その一方で、農村には中学以上のクラスがなく、子どもが教育を受けるために農村部からカトマンズに出てくるという問題が存在するそうです。JICA 事業地の公立学校では通う生徒の多くが貧困層で、農村部の親元から離れて、裕福な家に住み込み、朝晩は働き、昼間は学校に行くような生活をしているという説明がありました。また、働く家の主人は良い人とは限らず、手伝いをしていたときにコップを割ってしまっただけで実家に帰されてしまったという事例も紹介していただきました。お話を聞いた生徒のなかには、自分の村には小学校しかないため、村の子のほとんどがカトマンズに来て勉強すると答えてくれた子もいました。このように、多くの子どもや親、地域が教育を受けることの重要性を感じている現在も、都市部と農村部の間に教育格差が生じてしまっていることを学びました。



事業地の住民の方々との集合写真

AEPC 事業地の 2 つの農村ではソーラー発電、バイオガス、小型水力発電の事業サイトや受益者の家の様子を見学させていただきました。ソーラー発電は川からの水を引き上げるために使っており、水が貯水槽からパイプを通じて各家庭の蛇口から出てくる様子を見学することができました。また、ソーラー発電は 1 つの婦人会が運営・管理しているという説明があり、女性が社会のなかである程度

の地位を確立していることが推察できました。双方の村の住民が、エネルギーの普及により家事以外のことに費やす時間が増えて子どももより長時間勉強できるようになった、と仰っていました。現金収入の獲得につながる事例も伺いました。このように、エネルギーへのアクセスの拡大は、ただ電気を使うことにより生活水準が向上する効果があるだけでなく、ジェンダー格差や経済的格差のような諸問題を改善するきっかけにもなっていることが分かりました。

このスタディツアーでは、毎日が新たな学びと感動の連続で非常に充実していました。都市部と農村部の双方の生活に触れ、現地の様々な立場の方からお話を伺うことは、座学や文献調査だけでは知り得ないことを学ぶことができる有意義な経験でした。それだけでなく、共に参加するメンバーと意見を共有することも多くあり、自分とは異なる見方をしている人からも気づきを得ることができました。このような貴重な機会に恵まれたことに感謝し、このスタディツアーを通して得た経験や感じたことを今後の学習に生かしていきたいです。

(生活科学部心理学科 1 年 今西 凜花)

## 2) カンボジアタディツアー学生報告

2019 年 9 月 14 日から 9 月 22 日にかけて「国際共生社会論実習」カンボジアスタディツアーが行われた。参加者は 1 年生 7 名、2 年生 3 名、計 10 名である。

出発前に 6 月から 9 月にかけて約 10 回の事前学習や安全講習を行った。カンボジアの歴史、ポル・ポト時代の背景について学び、様々な統計からカンボジアの現状を知り、JICA の国際協力専門員による講演や対話型ファシリテーションを用いた途上国の人との話し方を学ぶ講演など、多くの文献を読み参加者同士議論し合いながら理解を深めていった。参加者は事前学習をふまえて教育、子育て、健康、政治など多種多様なテーマで現地調査を実施することになった。

スタディツアー初日は成田空港を出発し首都プノンペンに滞在した。高いビルや車やパイ

クの激しい交通量など日本とあまり変わらない風景に参加者一同興味津々な様子であった。

2 日目はプノンペンから 3 時間ほど離れたコンボンチャム州に移動した。市場を見学したり、お寺を訪れたり、キズナ橋を見たりと市内を見て回った。コンボンチャム州はカンボジアで 2 番目に大きい所で街並みがきれいで栄えていた。午後は次の日から始まる民家へのインタビューに向け、ミーティングを行った。実りのある現地調査にするため各自のテーマを確認し、準備をした。



コンボンチャム州での家庭訪問

3 日目から 5 日目にかけてはコミュニケーションチーフ、ヘルスセンター、小学校と高校の学校長、民家へのインタビューや学校訪問が行われた。コミュニケーションチーフからはコミュニオン全体について、ヘルスセンターではコミュニオン内の健康管理や保険制度について、学校長からは学校の概要や進学率・就職率・ドロップアウトについて話を聞くことができた。民家では教育、健康、政府の制度、SNS 利用など多方面からカンボジアで暮らす人々の生の声を聞くことができた。訪問先を訪れて金銭面の影響で学校をドロップアウトしたり満足できる医療が受けられなかったりした人と出会い、また給料の低さから教師の質が向上しないという話を聞き、私は政府の制度の未完成さを感じた。

6 日目は車椅子工場を訪問し、AAR の駐在員の方から障害者支援について話を聞いた。現在カンボジアでは 15 歳～19 歳の障害者の 60%弱が就学経験がないというデータがある。これを変えるために駐在員の方たちは子供の障害児教育を促し、障害児者に適切な教室の設置に力を注ぎすべての障害児童が地元の学校に通えるように支援している。また貧困層の障害児童が学校に通えるようになれば貧困層の児童も同様に通えるようになるだろうとおっしゃっていた。午後には職業訓練校を訪問し、施設を見て回り、障害者の方から話を聞いた。施設はとても充実していて、障害者の方も快適に仕事に集中できるような環境だった。



AAR,WCD 訪問

7 日目は王立プノンペン大学カンボジア日本人材開発センターで日本語を学んでいる学



CJCCの学生との交流

生と交流した。教育や政治など様々なことについて議論し、有意義な時間を過ごすことができた。午後はJICAカンボジア事務所局を訪問し、現在カンボジアが抱えている問題やJICAが行っている政策について話を聞いた。また青年海外協力隊として現在コンポンチャムでナースとして活動している女性からも話を聞くことができた。彼女から日本の姿勢を押し付けるのではなく、なぜこのようになったのかバックグラ

ウンドがどうなっているのかを考えることが大切だということを学んだ。カンボジア滞最終日はポル・ポト時代にクメール・ルージュによって人々が収容されていた場所であるトゥールスレン虐殺博物館とセントラルマーケットを訪れた。トゥールスレン虐殺博物館では当時の状況を物語る写真や絵画、独房を目にし、実際訪れてみないとわからない恐ろしさや残酷さを五感を使って感じる事ができた。セントラルマーケットでは商人の生活風景を見たり、それぞれお土産を買ったりと楽しい時間を過ごした。

1週間という短い期間の中で私たちは様々な場所を訪れ、たくさんの人と出会い、考えを深めることができた。学生が学校をドロップアウトしてしまったり、教師の質が十分でなかったり、貧困層に対する制度が不十分だったりと未完成な部分が多々あることを知った。スタディツアーで多くのものを見たり聞いたりして視野が広がった。貴重な経験ができたこと、また今回このカンボジアスタディツアーに携わって下さったたくさんの方々に感謝するとともに、ここで得たことを今後の学びに活かしていきたい。

(文教育学部言語文化学科 2年 中島 百花)

# STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 (グローバル協力センター「共に生きる」スタディグループ)

**STUDY FOR TWOの理念**

**勉強したいと願う  
すべての子どもたちが  
勉強できる世界に**

**大学の教科書を  
より安価に購入できることが  
当たり前の世界に**



**STUDY FOR TWO 支援の仕組み**

学業に大学生から不慣れになった教科書を寄付していただきます。

収益を発展途上国の子どもたちの教育支援として寄付をしています。  
※収益の一部は活動費としています。

教科書の寄付  
お返し  
寄付  
STUDY FOR TWO  
寄付  
寄付

WIN WIN

先着順

学期を始め、寄付していただいた教科書を大学生に約半額で再販売します。

現在STUDY FOR TWOはラオスの子どもたちへ国際センターの「Room to Read」に、またバングラデッシュの子どもたちへ「Room to Read」の「学校建設プログラム」に寄付をしています。

**STUDY FOR TWO 団体概要**

一般社団法人STUDY FOR TWO  
2010年設立(2015年 法人格取得)  
全国49支部  
学生会員数約700人  
支援先ラオス・バングラデシュ  
2018年度寄付金額 611万円



**STUDY FOR TWOの支援の仕組み**

**バングラデシュ**  
国際NGO Room to Readを通して支援  
● 学校建設プロジェクト  
● 女子教育プログラム



**ラオス**  
公益財団法人 民衆センターを通して支援  
● ダルニー奨学金  
● 学用品寄付



**STUDY FOR TWOの活動**

教科書の販売・回収  
全国合宿(年に2回)  
関東地区活(勉強会、情報共有。月に1回)  
スタディツアー(年に2回)



**STUDY FOR TWO お茶大支部**

2012年支部設立  
支部員数1,2,3年生 9人  
2019年度寄付金額 318,050円  
月2回程度のミーティング及び教科書の在庫整理  
年に2回の教科書販売と年に2回の教科書回収  
関東地区活や全国合宿などへの参加



# OCHANAN 活動報告

学生有志OCHANANメンバー（佐橋、後藤、大山、岡）

## OCHANANとは？

お茶大生（OCHA）が難民問題（NAN）にアクションをおこそうと、有志が集まり、2016年から活動を開始した団体です。「自分たちだからこそできること」をテーマに、身近なところからきっかけを見つけ、等身大にアクションを起こしていくことを目標にしています。

## 難民についての概要です

### 難民とは？

#### 難民の定義

1951年の「難民の地位に関する条約」では、「人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するなどの理由で、自国に在ると迫害を受けるかあるいは迫害を受けるおそれがあるために他国に逃れた」人々と定義されている。

#### 難民の数

2018年末時点で紛争や迫害によって移動を強いられた人の数は約7080万人、この20年間でほぼ2倍に増えた。7080万人のうち、国内避難民が4130万人、難民が2590万人、庇護申請者が350万人である。世界では108人に1人、2秒に1人が故郷を離れている。

#### 難民の受け入れ国と発生国

##### ○受け入れ国

- 1.トルコ 370万人（4年連続1位）
  - 2.パキスタン 140万人
  - 3.ウガンダ 120万人
  - 4.スーダン、ドイツ 110万人
- 世界の難民の84%が開発途上国で受け入れられている

##### ○発生国

- 1.シリア 670万人
  - 2.アフガニスタン 270万人
  - 3.スーダン 230万人
  - 4.ミャンマー 110万人
  - 5.ソマリア 90万人
- 難民の67%がこの5カ国に集中している

参考：UNHCR <https://www.unhcr.org/ja/> (2019/11/04 閲覧)

## イベントに参加したメンバーの活動報告も合わせてご覧ください

### JAR 難民アシスタント養成講座 参加報告 難民支援協会

#### JAR（難民支援協会）について

「難民を受け入れられる社会」の実現のために、難民保護の専門集団として、難民一人ひとりの来日後から自立までの道のりに寄り添って支援している団体。難民に向けての法的・生活・就労・コミュニティ支援のみならず、日本社会に難民の現状を伝え働きかけるため、政策提言やネットワーキング、広報活動にも力を入れている。中でも難民アシスタント養成講座では、誰もが市民として最前線で難民問題に関わる専門家や当事者から現状を学ぶことができる場となっている。

#### 難民アシスタント養成講座で学んだこと

現在世界には7080万人の難民がいると言われていて、一方で日本の去年の難民認定率はたった0.3%の42人。そんな中難民保護という視点から、制度の課題や難民一人一人を社会の一員として暮らしていけるような受け入れのあり方や地域づくりについて考えるのが本講座だ。参加者は学生をはじめ、社会人の方やリタイアされた方も大勢おり、関東圏以外の遠方からの参加者も見受けられた。2日間の本講座ではJAR理事やスタッフ、弁護士などの専門家や難民の方から直接ご講義いただいた。トピックは、日本の難民支援の現状について生活支援から法的支援、日本の移民政策、海外での受け入れ事例とトレンド、そして私たちに何ができるのかと多岐に渡る。

毎日のように現場と関わっている専門の方や当事者である難民の方のお話からは、過酷な現場の様子が語られた。難民申請中の難民は、親戚や知り合いがいなくても、住むところもなく、働くこともできず、食べることもできないホームレスの状態に陥ること。難民申請は長く10年かかることもあること。収容所では精神的にも身体的にも参ってしまっただけでハンガーストライキや自殺を試みる人もいられること。日本の話だと思つくと正直信じられず、心が痛くなるような事実ばかりであった。

一方、申請が通り日本で飲食店を営み幸せに暮らしている元難民のお話も伺うことができた。新たな人生を歩ませてくれた日本やJARにとっても感謝しているとの語りもあった。もちろん難民を受け入れることは簡単ではなく、解決しなければならぬ問題はまだ残っている。しかし、難民のみならず外国人が年々増えている今、それを負担として捉えるのではなく、日本社会の新たな一員として捉え、語学支援や就労支援など積極的にサポートに力を入れていけるような風土ができれば、困窮するともえる日本の難民申請のハードルを少しずつ下げていけるのではないだろうか。

#### 私たちができることは？

この過酷な現状を変えるために私たちが取るべきアクションはまず、難民について知ることだ。日本にも難民がいる。家族と離れ、お金もなく、一日暮らすにも苦労している難民がいる。収容所で苦しむ難民がいる。そんな衝撃的な事実をもっと多くの日本人に知ってほしい。JARがウェブで公開している「ニッポン複雑紀行」や「日本にいる難民の話」など難民に関する記事を読んで現状を知だけでも、少し難民問題を自分に寄せることができる。それが次のアクション（JARが主催している古本寄付やmeal for Refugeesという食を通じた支援、そしてochananが関わらせていただいているイブラさんの商品購入など）へのきっかけとなって、輪が広がれば理想である。皆さんも、雑貨やネット、食や本、映画など身近なものをきっかけに難民に関心を持ってみてはいかがだろうか？

## OCHANANの活動

### OCHANANについて

お茶大生（OCHA）が難民問題（NAN）にアクションをおこそうと、有志が集まり、2016年から活動を開始した団体です。「自分たちだからこそできること」をテーマに、身近なところからきっかけを見つけ、等身大にアクションを起こしていくことを目標にしています。

### これまでの活動

これまでにやってきた主な活動を紹介します。

- ①イブラ・ワ・ハイトさんを通じたシリア難民女性の自活支援  
紛争が続く中、シリアからエジプト・トルコ・ヨルダンなどへ避難し、避難生活を送る女性の作成した、刺繍小物を販売しています。くすみボタンやワッペンなどの商品は、デザインとしても可愛く、雑貨や学内販売では、多くの方が手に取り、作成した方たちの置かれている状況に思いを馳せてくださいました。私たちは、一つ一つの作品にドラマがあることを伝えられるよう販売し、また、学生目線でも、どのようなデザインが人気になりそうかを伝えさせていただき、商品づくりに生かしていただいています。
- ②UNIQLOさんを通じた衣料品の回収  
学内にて、使わなくなった衣料品の回収を行いました。5日間かけて行いましたが、1回訪れてくださった方が再度履を持ってきてくださるなど、学内に共にアクションを起こそうとしてくださる方が多くいることを知ることができました。
- ③難民映画の鑑賞と学内でのポスター報告  
クルド難民、アフガニスタン難民、スーダンのロストボーイズなど、場所や時期は違っても同じく移動せざるをえない状況に置かれて移動する人々の映画を鑑賞しました。メンバーからは、「ニュースを通してのイメージしかなかったが、将来の夢があり愛する人がいるという自分と同年代の主人公に、難民一人ひとりにそれぞれの生活や思いがあることを感じた」「難民が命をかけて逃げているということと理屈上はわかってはいたつもりであったが、私の想像を超えて命をかけて移動していることがわかった」「難民に対して排他的な人をただ批判するのではなく、その立場も理解した上で、地域全体で協力しながら難民を尊重できる社会を作りたい」などの感想が出ました。

### 活動を通しての学び

活動前は、難民問題と聞くと、自分には何も解決できない大きな問題と感じていました。活動していくなかで、難民と一緒に言ってしまうことが多いですが、それぞれに人生や思いがあることを、現状に思いを馳せることだけでも意味のあることだと考えるようになりました。私たちのできることは限られているかもしれませんが、できることを探し、アクションを起こしていくという姿勢は忘れずにたいです。また、これからは、周りへの発信や働きかけをさらに強めていきたいと考えます。

## 彼となる活動の詳細です

### イブラ・ワ・ハイトについて



イブラ・ワ・ハイトはアラビア語で「針と糸」。泥沼のシリア紛争の中、生活基盤のほぼ全てを失った女性たちに「針と糸」で収入の道を開くプロジェクトです。針と糸さえあればどこでも作れるとの思いから名付けられました。現在、トルコ、エジプト、ヨルダン、ホームズの4つのチームで刺繍が作成され、日本では博物館や雑貨店に加え、アースデー等の各種イベントで適正価格で販売されています。

シリアでは、メソポタミアの神話やイスラム文化を彷彿とさせるモチーフが描かれた大判の刺繍が人々の生活を彩ってきました。イブラワハイトでは、これらのモチーフを取り出しワッペンやくすみボタン、アクセサリ等にアレンジして販売されています。女性たちの自由な感性で手作りされた刺繍は、ひとつひとつ色や表情が異なります。最初は女性たちの技術は乏しかったそうですが、数年でスキルを身につけ、今では、彼女たちから新しい絵柄や作品が提案されるそうです。女性たちにとって、手を動かすことが心の拠り所になっているという話も伺いました。しかし、シリアの人々の生活は依然として厳しく、作品の中には紛争の悲しみが表れたものもあります。

私たち学生にできることは少ないかもしれませんが、少しでも多くの方がシリアのことを考えるきっかけになれば、という思いで販売のお手伝いをさせて頂いています。今後学内販売を計画していますので、ぜひ一度イブラワハイトの刺繍を手にとって彼女たちに思いを馳せてみて下さい。

イブラワハイトHP：<https://burawahatt.wixsite.com/burawahatt>



ホームズチームの刺繍のシアター（ケル可愛らしい刺繍とともに、左にまみれたしや、真っ黒の時計台なども描かれている



メソポタミアに伝わる女神ティアマトのワッペン

## 2019年度内閣府国際社会青年育成事業 メキシコ・ペルー派遣団 成果報告



人間文化創成科学研究科理学専攻数学コースM1  
森島佑美

### 内閣府青年国際交流事業

- 昭和34年度に、当時皇太子殿下(現 上皇陛下)の御成婚を記念して開始され、以来50年以上実施。



### 国際社会青年育成事業

目的：派遣・招へい国の青年等との交流を始め、自国文化の紹介、相手国の事情研究等により、国際化の進展する社会の各分野で指導性を発揮できる青年を育成するとともに、参加青年による青少年健全育成活動に寄与する。

#### 1. 日本青年海外派遣

##### 1) 派遣国

- オーストリア・リトアニア  
テーマ「自国のアイデンティティと多文化共生」
- メキシコ・ペルー  
テーマ「災害対策」
- フィリピン・ベトナム  
テーマ「東南アジアと日本の労働社会」



- 2) 派遣人員：各派遣団団長1名、副団長1名、参加青年12名の14名
- 3) 派遣時期および期間：9/18~10/5の18日間

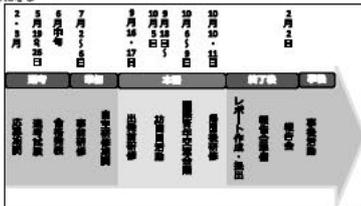
#### 2. 国際青年交流会議について

##### 1) 目的

日本青年海外派遣事業及び外国青年招へい事業の参加青年が各テーマに分かれてディスカッションを行うことにより、国際社会に生きる青年の育成を図る。

- 2) 開催日程および場所：10/6~10/9の4日間

#### 活動の流れ



#### 自主研修期間での準備

- テレビ電話でのディスカッション練習
- 英単語学習
- 各国についての学習(歴史・経済・文化etc...)
- 「防災対策」についての学習
- 企業からの物品協賛取得
- 日本紹介(ソラン節、歌、ブース、プレゼンetc...)
- SNS発信

#### スケジュール

9/18	成田→メキシコシティ着	9/26	メキシコシティ→リマ着
9/19	メキシコ青年行・メキシコ日本人会 春秋対面 チャルテンブック・ベジマス・アルプス交流 見学	9/27	ペルー-日本大使館 高級訪問 日米人協会(IRA) 訪問 邦友より送られる青年の船ペルー-代表青年との夕食交流会
9/20	国立災害予防センター 見学およびディスカッション	9/28	ホームステイ
9/21	メキシコ国立自治医科大学(UNAM) 観光 UNAMの災害救助犬養成プログラム、技術・意見交流会 中央メキシコ州の「青年志士のリーダー」	9/29	ホームステイ
9/22	グワイアテカ/産科 見学	9/30	民間訪問(ソラン節・日本ペルー事務所 春秋対面)
9/23	国立防災センター 訪問・意見交流会 UNAMの災害救助犬研究所 国立地震院 訪問	10/1	国立工科大学(UTM) 訪問・意見交流会 インカマケット
9/24	シグゾウ市立美術館・フリーダ・カローロ美術館 見学 国立科学博物館 国立科学	10/2	パナマカンパニョーニョ パナマカンパニョーニョ 見学
9/25	国家警察(ソラン)山車 大発表 見学 日本メキシコ学院 訪問	10/3	リマ→メキシコシティ着 メキシコシティ→成田帰

### 記録写真

#### メキシコ



#### ペルー



#### 国際青年交流会議



#### この事業だからこそ得られるもの

- 海外青年との交流  
...どの青年も懐いているような團の青年と交流したいと思っているので、たくさん仲の良い友人を作ることができます！
- たくさんの人との繋がり  
海外青年以外にも・・・  
・コーディネーター  
・ホストファミリー  
・ホストファミリーの友人  
・訪問先の学生  
・日本青年・団長副団長  
・スタッフの方々 などなど
- 英語力の向上  
...現地での活動はほぼ全て英語。通訳者の同行もなし。  
→英語を聞く・話すことに積極的になる  
※英語が得意でなくても、通訳にはほぼ影響ありません
- 少人数だから一人一人重要な役割がある  
...リーダーはもちろん、日本紹介係・ディスカッション係・写真係など全員係を担当します  
主体的に行動することが求められるので、やりたいことは自分のやる気次第でたくさん挑戦できます！

あなたも日本代表青年として事業に参加してみませんか？

IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に  
関する支援事業（教育・研究成果の  
国際社会への還元）



## 1. アフガニスタン女性教員・研究者の短期研修（野々山基金）

### （1）概要

本事業は、アフガニスタン女子教育支援の継続とネットワークの維持、アフガニスタン女性研究者の研究・実務レベルの向上を目的に 2012 年度より実施しており、これまで、8 年間にわたって、計 16 人を受け入れている。こうした取り組みは、国費留学生のフォローアップの役割を果たすとともに、留学生候補者の発掘・準備にもつながっている。これまで、6 名がフォローアップ（うち 2 名は元奈良女子大学留学生）、2 名が留学前研修で参加し、また現在、2 名が留学準備中である。また、招聘者は 大学教員、卒業生が中心であり、同大学とのネットワーク維持にも重要な役割を果たしている。

2019 年度は、カブール大学理学部科学科及び農学部卒業生 2 名を受け入れ、1 月 19 日から 2 月 1 日の間、講義・実験、関連施設の視察等を行った。

### （2）学内受入教員

森 義仁 基幹研究院・自然科学系教授

（グローバル協力センター員／講師・研修コーディネーター）

由良 敬 基幹研究院・自然科学系教授（グローバル協力センター員／講師）

### （3）日程

2019 年 1 月 19 日～2 月 1 日まで（日本滞在は 1 月 20 日～1 月 31 日まで）

月	日	曜日	研修員行動予定	宿泊
1	19	日	カブールドバイ (EK641)	NA
	20	月	ドバイ-成田 (EK318)	大塚宿舎
	21	火	研修説明 研修・森教授	
	22	水	開講式 研修・森教授 樹木医の活動	
	23	木	研修・森教授 東京大学未来ビジョン研究センター	
	24	金	豊島卸売市場、東京水道歴史館 研修・森教授	
	25	土	日本語講座入門 薬局訪問	
	26	日	自習	
	27	月	室伏学長表敬	

		研修・ 博士 マイクロ波技術応用	
28	火	研修・由良教授	
29	水	静岡県島田市レジャーホテル訪問	
30	木	研修・森教授 分光光学実験とビデオ教材 中道奈良女子大学研究員、商社の方との交流会	
31	金	評価会・閉講式 懇親会 成田-ドバイ (EK319)	機中泊
1	土	ドバイ-カブール (EK640)	NA

### (3) 研修内容

両研修員には事前に希望研修内容を確認し、それらの希望を考慮した研修課題を準備した。また、大学での講義のみならず、社会における科学技術の活用についても学ぶ機会を提供した。

森教授の講義では、現代科学に必須の分光光学を、簡単な分光器（CD の裏面利用）を作成して自然光と蛍光灯の光源の組成の違いについて、また偏光フィルターを用いた装置を作成し物質などの偏光に対する性質を確かめた。その後、農工大学高柳教授提供の英語版ビデオにより農作物の非破壊分析の応用を学習した。

由良教授の講義では、計算機を用いた分子生物学の基礎について講義を行った。細胞を構成する分子であるDNAとタンパク質の構造と機能を学習した上で、それら分子の構造が各個人によって異なっていることが最先端の生命科学で明らかになっていることを学び、それらの違いが疾患と関連していることを学習した。

現場視察として、東京都水道歴史館では、東京における水確保と水質改善のために奥多摩の広大な山林を常に整備している英語版ビデオを視聴し、英語のパンフレットを準備している豊島卸売市場では、農産物流通と食の安全・安心の現場を見学する機会とするだけでなく、早朝訪問することで農作物の価格が決まるその瞬間に立ち会った。このような機会を通じ化学や農学と実社会の関わりについて学ぶことができた。

研修生は、(アフガニスタンにおける女性の雇用機会が少ないことが影響していると思われるが、) 化学や農業の技術を活かした起業にも関心を有しており、起業に取り組む日本人女性（ビッグデータ研究者、樹木医）にも起業の成功・失敗の実際について話を聞くことができた。また 30 日最終日には商社のライフサイエンス部門に勤務する女性をご招待して商社の仕事について聞く機会となった。

2 月 29 日には、在日アフガニスタン人のレジャーホテル医師が静岡県島田市に設立した、クリニックと老人介護施設を訪問した。レジャーホテル医師からは、日本とアフガニスタンはかけ離れていると思うかもしれないが、日本社会も、高齢者の医療問題、数多くの災害等、様々な深刻な問題とそこへの取り組みを行っており、アフガニスタンから見ても参考にすべき

経験があるとの話があった。

最終日のアフガニスタン情勢を聞く懇親会には、アフガン女子教育支援関係者、研究者、学生等が参加し、児童婚の背景と撲滅の取り組み、現在進行中のタリバンとの和平が女性の権利に与える影響（ヘジャブ着用、男女別学、女性の職業の制約等）について議論された。

#### 開講式

#### 森教授の講義

## 2. アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト（国際協力機構（JICA）PEACE プロジェクト）

国際協力機構（JICA）は、アフガニスタンの持続的開発を支える中核人材の育成を目標として、2011年から2020年の間、同国の行政官及び大学教員を日本国内の大学院修士課程等へ受け入れる「未来への架け橋・中核人材プロジェクト（PEACE）」を実施している。

PEACE プロジェクト研修員として、

大学院博士前期課程理学専攻に進学し、研究テーマの「BRC1 遺伝子に見られる変異と表現型の関係 DB 構築」に関する研究を進めた。

JICA 支援による特別プログラ

ム<sup>(注)</sup>によるチューターと補助教材を活用した。

帰国後は乳癌に関する研究を活かし、特に女性に関わる分野で研究者、また指導者として活躍することが期待される。

（注）既存の大学の授業や研究室での指導に加えて特定の目的達成や開発ニーズを踏まえた特別の活動を行うことにより更なる効果の向上を目指して実施される付加的プログラム。グローバル協力センターでは、JICA との業務委託契約に係る事務処理を行いサポートした。

### 3. アフガニスタンへの絵本寄贈（野々山基金）

アフガニスタンをはじめとする開発途上国における女子教育に関する事業への支援を行うことを目的として平成 23 年度に設置された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の活動として、同国で絵本・図書館事業を展開する公益社団法人・シャンティ国際ボランティア会と協力し、平成 24（2012）年度から絵本の作成・印刷・配布を実施している。

2019 年 12 月 14 日、SVA アフガニスタン事務所所長代行のワヒド氏がグローバル協力センターを来訪し 2019 年度絵本作成状況、2018 年度絵本の活用状況また図書館活動の成果について報告いただいた。

#### （1）来訪者・来訪日

氏

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）アフガニスタン事務所所長代行  
2019 年 12 月 4 日

#### （2）2019 年度絵本作成状況

- ・今年度の絵本は、「恩返し」。池で溺れそうになって鳩に助けってもらった蟻が、猟師に撃たれそうになった鳩を助けるお話。
- ・絵本作成は、コミュニティからの民話の収集→絵本作成→出版委員会によるチェック（文章等）→教育省の許可→図書館への配布、というプロセスを経る。

#### （3）2018 年度絵本の活用状況

- ・昨年度、本学の支援で作成した栄養絵本「ハミダと栄養三兄弟」についても図書館に配布され、子供たちに喜ばれている。アフガニスタンでは初めての栄養の知識を伝える絵本である。絵とストーリーがあることで、文字だけの本より子供の記憶に残りやすい。
- ・図書館のみならず、クリニックからも、栄養絵本が欲しいという声が寄せられている。

#### （4）図書館活動の成果

- ・教科書以外に本に接する機会のない子供も多い。多くの子供が図書館に来ることで読書の楽しみを知る。このことは、その後の就学の継続にもつながっている。
- ・教科書が難しすぎて、学校では読み書きが身につかなかった子供が、絵本の読み聞かせに興味を持ち、読み書きができるようになった例もある。
- ・子供たちは、絵本を通じて、読み書きを学ぶとともに、みんなと仲良くする、お年寄

りを大事にする、自然を守る、といったことも学ぶ。地震のときの対処の仕方について教える絵本もある。

- ・図書館に来ることで、活発になった子供もいる。
- ・図書館における絵本事業は、特に帰還難民の子供（ダリ語、パシュトゥ語を学んでいない。また、アフガニスタンの学校に通えていない。）にとって、ダリ語、パシュトゥ語を学ぶ機会となっている。
- ・絵本は貸し出しもしている。貸し出しを通じて、親や兄弟姉妹も、絵本に接する。（親が子供に「絵本を借りてきて欲しい。」という事例もある。）
- ・当初はイスラム指導者が絵本はイスラムの教えに反すると言っていたが、これは、正しいイスラムの教えではない。現在は、イスラム指導者も絵本の意義を認め、モスクにも絵本を置きたいと言ってくる。（絵本があると子供たちが来る。）
- ・現在、図書館で所蔵しているのは、500タイトル超。
- ・アフガニスタンにおいて子供向けの絵本は依然として少ない。シャンティ、BBC等が発行している絵本はあるが、民間の出版は少ない。パキスタン、イランの絵本は、国間の関係から、必ずしも好意的に受け止められていない。
- ・2020年には、シャンティの支援により、教員養成校附属小学校にモデル図書館を建設する計画がある。教育省も賛同している。

(参考)

○これまでの野々山基金支援による作成絵本（ダリ語、パシュトゥ語各 1200 部を配布）

2013	孤児の女の子
2014	亀とイチジクの木
2015	クジャクの羽
2016	幸せの半分は健康から
2017	パンダの冒険
2018	ハミダと栄養三兄妹

○2018年度の絵本の活用状況：図書館・児童数

配布対象小学校・図書館	校・館数	児童数
小学校図書館	141 館	222,417 名（登録児童数）
公共図書館	11 館	500 名（1日あたりの利用者数）
SVA 運営図書館	1 館	168 名（1日あたりの利用者数）

(5) アフガニスタン情勢と教育の現状（世論等に関する観察）

(アフガニスタン情勢)

- ・9月に実施された大統領選挙は、ガニ大統領とアブドゥラ行政長官の間で、選挙結果が

公表されていない状況。前回選挙と同様、連立政権になるのではとの見方もある。

- ・タリバンとの和平については、米国、アフガニスタン政府とも交渉を継続している。
- ・長年の内戦でも問題が解決しなかったことから、政府側、タリバン側ともに、和平しか選択肢がないと考えており、その道を探っている。
- ・市民の間でも、以前はタリバンに対する拒否反応があったが、現在はタリバンを政府に入ることに対する抵抗は以前より少なくなっている。
- ・さらにアフガニスタン国内における IS（アフガニスタンにとっては、外国勢力）の台頭があり、これを抑えるためにも、タリバン、政府とも戦闘という選択肢はないと考えている。
- ・2018年夏の3日間の停戦で、タリバン兵は市民の生活に接し、その戦闘意欲は下がっている。
- ・パキスタン、イランに250万人のアフガン難民がおり、両国はアフガニスタンへ帰還させることをめざしているが、アフガニスタンにはこれらの難民を受け入れる余力がない。このことが緊張を生んでいる。

#### (教育の現状)

- ・850万人が小学校に就学している一方で、370万人が未就学。そのうち、60%は女子。障害児の就学も5%と低い。
- ・子供（男児、女児とも）を学校に行かせたいと考えている親は多いが、治安、また校舎の不足が就学率の向上を阻んでいる。
- ・現在も50%の学校は校舎がない。零下の屋外で授業や試験をやっている。また、校舎がないと女子が他人の目にさらされるため、親は学校にいかせたがらない。（特に中学生以上）
- ・10歳で婚約し、夫側の家族が学校に行かせない、といったケースもある。

#### (図書館の様子)



#### 4. 乳幼児ケアと就学前教育研修（国際協力機構（JICA）課題別研修）

##### （1）概要

お茶の水女子大学では、JICA の委託を受け、「中西部アフリカ幼児教育研修」を 2006 年度から 2017 年度にかけて、12 年間実施してきた。2018 年度からは、それまでの成果を継続する形で、対象地域を拡大し、「乳幼児ケアと就学前教育（アフリカ・中東）」を実施している（2018～2020 年度の 3 年間実施予定）。今回の研修は、2018～2020 年度の 3 年計画の 2 年目に当たるものである。

##### （2）背景と目的

途上国においては財源不足と政府関係者の ECCE（early childhood care and education: 乳幼児ケアと就学前教育）に関する意識の低さ等から、国家政策として ECCE 分野を専門とする人材が不足している状況がある。こうした状況を踏まえ、特に ECCE へのアクセスや質の改善が急務の課題となっているアフリカ・中東地域を対象に ECCE の整備・普及を図るため、同分野の政策レベルでの人材育成と能力向上を目的とし、本研修を実施する。

##### （3）対象国・人数

6 か国・計 10 名

ヨルダン、エジプト、リベリア、マダガスカル、カメルーン、サントメ・プリンシペ（ヨルダン、エジプト、マダガスカル、カメルーンは 2 名参加、他の国は 1 か国 1 名）

##### （4）研修員

中央の教育省、子ども省など、政策レベルで幼児教育や就学前教育を監督している省庁の担当課長レベル。

##### （5）研修期間

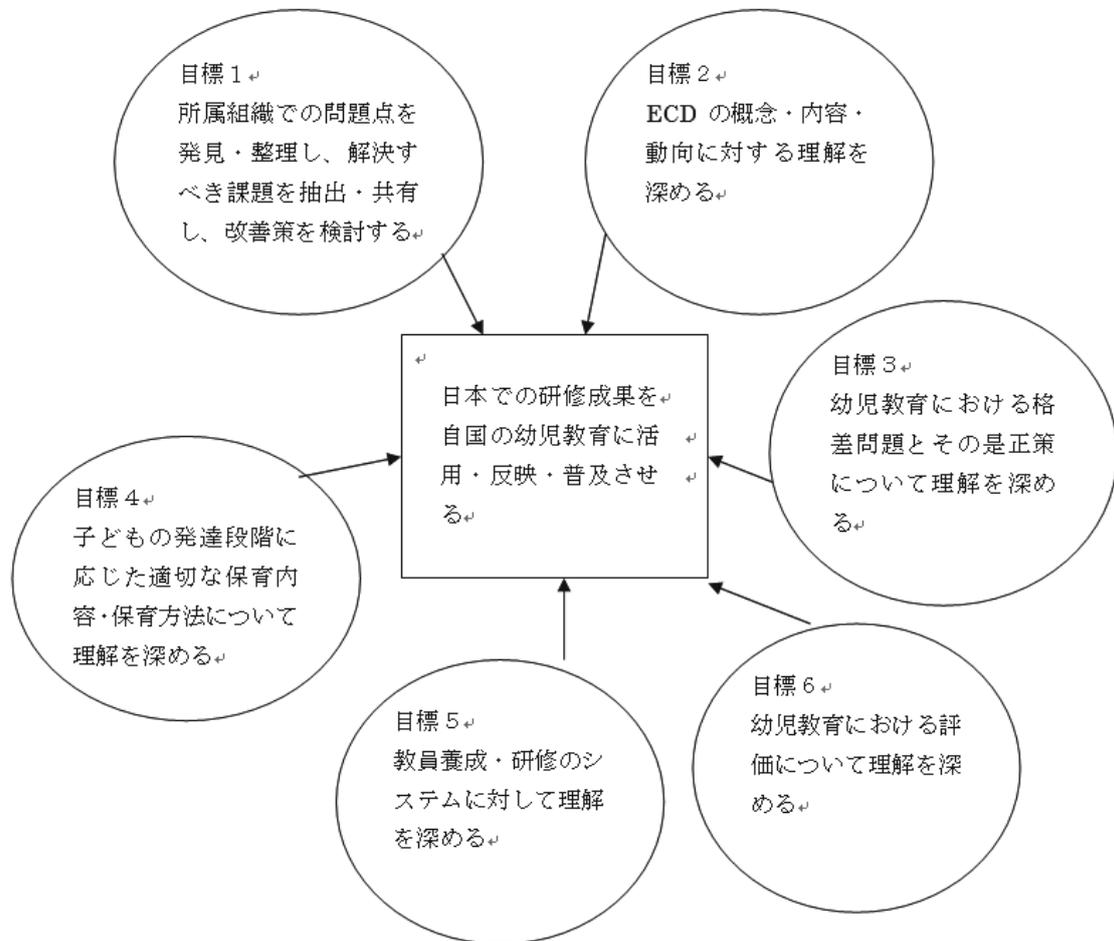
2019 年 11 月 11 日（月）～12 月 6 日（金）

##### （6）プログラム概要

次頁の 6 つの単元に沿って、講義、就学前教育機関視察、教員養成・研修機関視察、遊びを通じた教育や教材作成のワークショップ、研修員プレゼンテーションを実施した。研修員の理解を確実なものにするため、週 2 回の振り返りも実施した。

##### 主な訪問先

お茶の水女子大学・同附属幼稚園、聖隷クリストファー大学、保育園、無認可保育園、東京おもちゃ美術館、国際子供図書館等。



## (7) 実施機関

お茶の水女子大学

コースリーダー：浜野 隆教授

## (8) 成果（研修員の学び）

1) 案件目標「日本での研修成果を自国の幼児教育に活用・反映・普及させる」について研修員は、講義（特にエビデンスに基づく研究成果の紹介）や視察を通じて、日本における子ども中心の教育、遊びを通じた学びと、自国における小学校への準備教育としての就学前教育、一斉授業の違いについて具体的に理解を深めることができた。また、今後、自国でも子ども中心の教育を取り入れていくことが重要だと考えている。

一方で、多くの国では、小学校への準備教育が就学前教育の役割と位置付けられており、子ども中心の教育に対する抵抗も予想される。今後、研修員が帰国研修員とも協力し、就学前教育関係者が子ども中心の教育、遊びを通じた学びの実際に触れ、理解を深めることに取

り組むことが重要である。

2) 単元毎の達成 (研修員の自己評価)

単元	研修員の自己評価	コメント例								
単元1 所属組織での問題点を発見・整理し、解決すべき課題を抽出・共有し、改善策を検討する。	<table border="1"> <tr> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>8</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </table> 「4. 十分達成した」～ 「1. 達成していない」	4	3	2	1	2	8	0	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>他の国のプレゼンテーションが、自国の課題を理解し、今後の取り組みを考える上で参考になった。(マダガスカル)</li> <li>ECD の効果的な実施のため、地方分権化が重要。(カメルーン)</li> </ul>
4	3	2	1							
2	8	0	0							
単元2 ECD の概念・内容・動向に対する理解を深める。	<table border="1"> <tr> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </table>	4	3	2	1	7	3	0	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>本研修で、子供の成長と母親、健康、栄養の関係について、貴重な知識を得た。(カメルーン)</li> <li>本研修の科学的な講義を通じて、子供の総合的な発達という ECCE の基礎を理解することができた。(マダガスカル)</li> </ul>
4	3	2	1							
7	3	0	0							
単元3 幼児教育における格差問題とその是正策について理解を深める。	<table border="1"> <tr> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </table>	4	3	2	1	3	7	0	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>自国の多くの課題に取り組む上で参考となる情報が得られた。(イエメン、サントメ・プリンシペ)</li> </ul>
4	3	2	1							
3	7	0	0							
単元4 子どもの発達段階に応じた適切な保育内容・保育方法について理解を深める。	<table border="1"> <tr> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </table>	4	3	2	1	7	3	0	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの講義や視察を通じて、日本における社会的教授法 (social pedagogy) と自国における小学校への準備としての就学前教育の違いについて理解できた。(カメルーン)</li> </ul>
4	3	2	1							
7	3	0	0							
単元5 教員養成・研修のシステムに対して理解を深める。	<table border="1"> <tr> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </table>	4	3	2	1	6	4	0	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>自国の教員養成・研修の制度・内容を考える上で日本の事例が参考になった。(マダガスカル)</li> <li>日本の教員養成・研修の仕組みの全体像を理解することができた。一方で、方法論を含む詳細については、十分理解できないと</li> </ul>
4	3	2	1							
6	4	0	0							

		ころがあった。(マダガスカル)								
単元6 幼児教育における評価について理解を深める。	<table border="1"> <tr> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </table>	4	3	2	1	6	4	0	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>本単元の内容は、就学前教育機関、子ども、教師の評価システムを策定するうえで非常に重要。</li> <li>自国への適用に際しては、調査が必要。</li> </ul>
4	3	2	1							
6	4	0	0							



開講式



東京おもちゃ美術館



ワークショップ「学びを通して学ぶ」



内田名誉教授講義「子ども中心の保育・幼児教育」

## V. その他



## 1. グローバル協力センター図書室利用状況

グローバル協力センター図書室は平成 23 年（2011）年から開室しており、国際協力、平和構築、開発に関する教育・研究、学習に必要な図書およびその他の資料を収集・管理し、お茶の水女子大学学部生、院生、附属高校生、卒業生および教職員の利用に供するよう務めた。2020 年 1 月末時点で 1630 冊蔵書している。開室時間は祝祭日、夏季・冬季一斉休業日を除く月曜日から金曜日の 10 時から 17 時で、今年度の年間開室日は 235 日である。貸出方法はセンターに利用登録をし、直接貸出、返却をする。今年度の利用登録者は学部生 49 人、大学院生 20 人、附属高校生 5 人、教職員 20 人であった。今年度も 200 冊を超える貸出と閲覧があり、平成 23 年（2011）年のセンター図書室開室より延べ 1731 冊の貸出を行った（2020 年 1 月 31 日時点；図 1）。

利用者は、附属図書館の蔵書検索 OPAC で資料を検索し来室している。主に文教育学部生の利用が多く、次いで大学院生の利用が多い。貸出が最も多い月は 7 月、8 月で、併せて 66 冊の貸出利用があった。特にフィードワーク関連の図書の貸し出しが多かった。センター図書の貸出期間は学部生でも 4 週間（貸出予約がない場合は貸出延長可）あるため、利用しやすいとの声がある。貸出本については、台帳と Access で管理し、利用者にはメールにて返却のリマインドを行い本の回収に努めているが、2020 年 1 月末時点で 1 年以上の長期未返却の図書が 6 冊ある。今年度、新規に貸し出した図書については、長期未返却の利用者はいない。このことから、返却のリマインドが回収に役立っているということが分かる。



## 2. 情報発信

### (1) ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント（公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など）の学内外への通知・案内と活動報告を中心に年間約 40 件の情報を掲載している。各種イベントの報告は「共に生きる」スタディグループ・メンバーをはじめとするイベント参加学生が執筆した。

活動報告のうち 14 件は英訳し、うち 10 件は英語版ホームページに掲載し、対外（国内及び国外）的な情報発信に努めた。残り 4 件についても順次ホームページに掲載予定である。

また、印刷・製本した報告書はすべて電子化（PDF 化）して、センターホームページの「刊行物」コーナーから閲覧できるようにした。

### (2) メーリングリストによる情報発信

2019 年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は約 150 人（2020 年 1 月現在）となり、学内外（国連、JICA、NGO 等）のイベント情報（国際シンポジウム、セミナー、インターン募集等）や「共に生きる」スタディグループの活動情報を発信し、学内外の公開講座やイベントへの関心を高めるきっかけを作った。

### (3) 大学メールマガジン、公式 SNS、学生ポータルサイトによる情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン（OchaMail）や学内電子掲示板（Digital Signage）、学生ポータルサイト、Twitter を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページや Facebook を利用するなど、よりタイムリーに、より広範囲にセンターの活動や取り組みを情報発信することに努めた。

---

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
女性の役割を見据えた知の国際連携  
令和元（2019）年度 実施報告書

2020年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax : 03-5978-5546

Email : [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)

---

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

**令和元(2019)年度 実施報告書**